

TOTO

2016年 秋号

Toward a Creative
Architectural
Scene

通信

Special Feature

Discovering
Assets

発掘の資源社会特集



Case Study 3 “KAGIYA bldg.”
“SANTEN bldg.”
“ATSUMI mansion”

価値を上げる
改修のレシピによって、
木造賃貸アパートなどの
覚醒を図る。



Case Study 4
“kubomi”

空洞化した複数のビルを、
一室ずつリノベーション。
地方都市に
活力を取り戻す。

資源の発掘

社会には、生かされずに眠っている資源がある。たとえば、鉄道や道路の高架下。あるいは空室がつづいているマンションやアパート。地方都市の空きビルや、田舎の古民家など。それらは平然と都市や地方に埋もれ、気づかれることなく放置されている。ただ時として、その状況に分け入って覚醒の端緒を見出す人たちが現れることがあり、「社会資源」として発掘される。そうして「社会資源」となった建築は、社会の一端をつくることにもなる。建築が、その社会の未来を担っているともいえ、いきいきと人々に使われている。

伊藤暁、大南信也、隅田徹	4
伊藤暁+須磨一清+坂東幸輔	10
榎山真人+古澤大輔	18
彌田徹+辻琢磨+橋本健史	26
連勇太郎	36

シリーズ		
旅のバスルーム99	文・スケッチ/浦 一也	ザ・チャールズ・ホテル(ドイツ・ミュンヘン) 44
現代住宅併走35	文/藤森照信「IRONHOUSE」設計/椎名英三+梅沢良三	46
最新水まわり物語41	東京ガーデンテラス紀尾井町	52
地域に生きる会社71	蔵持ハウジング	58
TOTOギャラリー・間で展覧会をします	トラフ展 インサイド・アウト	60
News File	TOTO News, Cera Trading News, Books	62

Special Feature

Discovering Assets

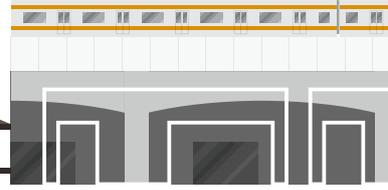
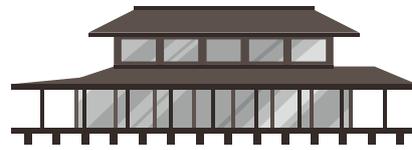
田舎の古民家を
再生したオフィス。
周囲をめぐる
縁側が企業と地域の接点に。

Case Study

I

“ENGAWA OFFICE”

1/400



Case Study

2

“UNDER THE CHUO
LINE RAILWAY
TRACKS”

駅に近い
鉄道の高架下にある、
2,000㎡ほどの
土地を活用。

特集

社会

特集／社会資源の発掘

インタビュー	過疎化した地方で働く	
ケーススタディ1	地域に溶け込む古民家オフィス	「えんがわオフィス」
ケーススタディ2	高架下の土地を生かす	「中央線高架下プロジェクト」
ケーススタディ3	空洞化ビルのモザイク・リノベーション	「カギヤビル・三展ビル・渥美マンション」
ケーススタディ4	既存覚醒のレシピ	「kubomi」

「TOTO通信」を
インターネットで
ご覧いただけます。

→ www.toto.co.jp/tsushin/

TOTO 通信

Toward a Creative
Architectural Scene
Number 512
Autumn 2016



Ito Satoru



過疎化した地方で働く

建築家

伊藤 暁

NPO法人グリーンバレー 理事長

大南信也

㈱えんがわ 代表取締役社長

隅田 徹

Special
Feature

Discovering Assets

“Interview”

みよがさ
徳島県名西郡の神山町は過疎化が進むなか、20年ほど前から活性化のための活動をつづけ、2011年には転入者が転出者を上まわった。鍵となったのは、民間のNPO法人グリーンバレーの取り組み。過疎化しつつも持続可能な町を目指して、企業や移住者の誘致をすすめている。また、そうした企業のひとつとして、神山町にサテライトオフィスを構えたのが、株式会社えんがわ。地方との垣根をはらうために、近隣の人々と交流できる縁側をもった、「えんがわオフィス」をつくった。古民家などの社会資源の活用が、成功の秘訣だろうか。オフィスの設計者のひとりである伊藤暁さんとともに、グリーンバレー理事長の大南信也さん、えんがわ代表の隅田徹さんに話を聞いた。



Sumita Tetsu



Ominami Shinya

特集 / 社会資源の発掘

インタビュー

どこにでもある過疎の町

——徳島県名西郡神山町は、大容量のインターネット通信の整備もあり、IT企業などがオフィスを構え、移住者も増えて、日本のシリコンバレーといわれるほど、地方活性化の旗手として知られています。まずは神山町がどういった町なのかを教えてください。

大南信也 全国的に見ればどこにでもあるような、人口6000人ほどの過疎の町です。きわだった特徴とか、有名な観光地とか、そういうものはほとんどありません。棚田がありますが、能登のように立派な棚田でもありませんし、観光の目玉になるような突出したものがありません。ある面では、すべてが中途半端に散在している、といった雰囲気だと思います。

——「えんがわオフィス」のある寄井商店街には、昔の建物も残っていますね。
大南 日本の田舎町にはよくある商店街です。たとえば、大きな街道沿いにあった宿場町のような歴史はまったくなくて、ほとんど町内の人だけが通行する場所でした。かつては、町内で自給自足できるように、こういった商店街で生活に必要なすべてを揃えることができました。

ただ、徳島市内や近郊に量販店やスーパーができたことによって、こういう商店街では、商店がどんどん減っていく状況が続いています。客が離れていって、店主の生活が成り立たなくなりますが、店を閉めて町外に出ていく、という悪循環が起っています。

——神山町は、その流れとは別の道を探ろうとしているわけですね。

大南 いえ、だいたいはまだ同じ流れのなかにいます。若い人たちが多少起業したり、こういうオフィスができたりして、活性化するひとつの芽が見えはじめたぐらいのところかと思っています。転入人口が転出人口を上まわったといっても、年間で150名ぐらいの人が亡くなられますから、全体の趨勢としては、やはりずっと人口は減りつづけていきます。そこに抗うのは難しいので、ものさしを根本的に変えたほうがよいと思っています。

——「創造的過疎」という考え方ですね。

大南 ええ。人口の数だけをものさしにしていたら、日本全体が人口減少の時代に入るわけですから、負け組ばかりになってしまいます。過疎はもう避けられないわけですから、もう少し内容的なもの、住人の生活の質をものさしにしていけば、こういう過疎の町が生き残る方法というか、持続する術を探せるのではないかと思っています。いろいろと試みてきました。アーティ

スト・イン・レジデンスや、神山での仕事を誘致するワーク・イン・レジデンスの企画などをしてきました。

よそ者を受け入れる土壌

——伊藤さんは、どういったきっかけで、神山町にかかわるようになったのですか。

伊藤暁 大南さんたちの活動を紹介する「イン神山」というウェブサイトがあるのですが、それを見たのが神山を知ったきっかけだったと思います。

大南さんが言われたように、人口減少によって困っている町は、日本にたくさんありますから、建築業界でも、そういう社会に適した試作住宅を考えるプロジェクトとか、イベントを企画するような流れがありました。僕もいくつかの地域で参加していましたが、なかなかうまくいきませんでした。たとえば、「東京に住んでいます」と自己紹介すると、地方の人の心の扉がパタンと閉じてしまうような経験を何度もしてしまいました。僕としては、自分が修業してきた建築設計という技術で社会に貢献したいという思いがすごくありましたが、今振り返ると、かなり空まわりしていたと思います。そういう悩みの時期に、神山町の情報を得ました。神山を訪ねてみたら、出会う人たちがみなさん楽しそうで、まずそのことにとても驚きました。

——そこから、いろいろな活動に参加するようになるのですか。

伊藤 ただ、そんなにたくさんイベントがあるわけではないですからね。大南さんが言われるように観光名所もほとんどありませんし、本当に普通の町だから神山に来る理由があんまりないんです(笑)。神山に来たくても来るネタが少ないので、自分でネタを考えなければならなくなりました。それで、この「えんがわオフィス」の隣にある寄井座という劇場で、寄井商店街の将来を考えるワークショップを有志の建築家や学生と企画したりしていました。そのワークショップがきっかけで、隅田さんと出会いました。

隅田徹 僕らの会社でサテライトオフィスを神山にもとうとうということで、すでに古民家を買う話を進めていたときに、伊藤さんたちを知ったんです。

働く場所を選べる会社

——テレビ番組や映像コンテンツの編集制作や配信などを行っている会社(株)プラットイーズ、(株)えんがわは子会社)が、地方にサテライトオフィスを構



神山町は、徳島市内から車で35分ほどの町。人口約6,000人、高齢化率46%。町内には「えんがわオフィス」のほかにも、古民家を再生したサテライトオフィスがある。「ブルーベアオフィス神山」(10)、「NAYA」(2012)、「DRAWING AND MANUAL」(13)、「神山パレ サテライトオフィス コМПレックス」(13)、「KOYA」(15) など。

えたのはなぜですか。

隅田 クライアントとの契約上、BCP（事業継続性計画。災害などの緊急時にも事業を継続できるようにする計画）を企業として考えなくてはならないということになり、それまで東京の恵比寿に1カ所しかなかったオフィスを拠点分散するために、サテライトオフィスを構えました。

また、社員自身が働く環境を選べたほうがいい、という考えもありました。経営者の役割のひとつは、社員の働く環境を整えるということだと思おうのですが、環境というものは人によって感覚が違いますから、選べるようにしたほうがいい、ということになったんです。どうせ選ぶなら、まったく異なるほうがよいと思ったので、恵比寿にある都心のオフィスと対比して、田舎の古民家オフィスをつくることにしました。

—— 神山を選ばれたのは、なぜでしょう。

隅田 全国20カ所くらいの場所で、古民家を探しました。北海道から九州まで、いろいろなところをまわりました。どこも悪いところではなかったのですが、普通、というか想像の範囲内、という印象でした。役所がとてもまじめに主導していて、企業誘致の担当者はすごくがんばっていましたが、住民とは少し温度差があるようでした。その点、神山は全然違った。役所の主導ではないし、そもそもあまり誘致活動はしていません（笑）。

大南 そうですね。「好きだったら来たら」くらいにしかすすめていません（笑）。—— NPOグリーンバレーは、行政から移住促進事業を任されていますよね。**大南** 大事なのは、町と企業とのあいだにフラットな土壌をつくるということだと思っています。受け入れ側が、企業に対してぜひ来てくださいとお願いまするかたちになってしまうと、企業が町側よりどうしても上の存在のようになってしまいます。でもお互いにとって、人間の一番心地のよい状態はフラットな関係だと思っんです。

伊藤 暁

建築家



Ito Satoru

いとう さとる／1976年東京都生まれ。2000年横浜国立大学工学部建設学科卒業。02年同大学大学院修士課程修了。02～06年 a a t t o コミソコト建築設計事務所。07年伊藤暁建築設計事務所設立。10年BUS参加。おもな作品「半丈の書架」(13)、「横浜の住宅」(14)、「WEEK 神山」(15)、須磨・清十坂東幸輔と共同設計。

隅田 移住促進のための営業的なことはほとんどしていなかったのですが、会う人会う人みんなが楽しそうでした。過疎、といいつつも、ぜんぜん暗くない。伊藤さんが言われるように、外の人が入りやすい雰囲気もありました。これが田舎で仕事をするうえで、すごく重要なポイントでした。

—— 「えんがわオフィス」で働いているのは、地元の人が多いと聞きました。

隅田 そうですね。ただ、僕は実質重視で社員を採用していますから、何も地元を優遇しているわけではないんです。徳島県の出身者で東京や大阪に出て仕事をしてきた人が、地元で求人があるなら地元で働きたいということで、たくさん応募してくれた結果なんです。

またもともといた社員も、恵比寿ではなく神山を選んだのは、徳島県出身者や四国出身者でしたので、結果的に地元の社員が集まりました。こういったサテライトオフィスの増加がいけば、地方出身者が都心に出ずに地元で働くことも増えていくでしょうね。

オープン&シームレスを具現化

—— 「えんがわオフィス」は、全体がガラス張り、家のまわりを縁側が囲む建築です。どういった考えがあったのでしょうか。

隅田 会社のコンセプトとして「オープン&シームレス」というものがあります。「オープン」というのは、情報を社内外と共有して新しいものをつくっていく、ということ。他社に情報をとられるというデメリットもありますが、情報が活性化するのでメリットも多いと判断しています。「シームレス」は仕事と暮らしを一緒に考えよう、というものです。仕事をしている時間はずっと長いわけですから、楽しく興味性をもってやれたらいいよね、と考えています。あくまで会社のコンセプトなのですが、この「オープン&シームレス」を具体的な建築にしてください、とお願いをしました（笑）。

寄井商店街

神山町役場周辺の寄井商店街。いくつか古い建物が散在している。「えんがわオフィス」もこの一画にある。



写真提供／伊藤 暁

寄井座

大正末期から昭和初期に建てられた劇場。昭和30年代半ばまで演劇や映画などが上演されていた。今また、復活が望まれている。



NPO法人
グリーンバレー
理事長

大南 信也



Ominami Shinya

おおみなみ・しんや／1953年徳島県名西郡神山町生まれ。1978年スタンフォード大学大学院修了。帰国後、神山にて住民主導のまちづくりを実践し、全国初となる道路清掃活動「アドプト・プログラム」や「神山アーティスト・イン・レジデンス」を始動。2004年NPO法人グリーンバレー設立。07年神山町移住交流支援センターを受託運営。結果、11年度に転入人口より転入人口が上まわる社会動態人口増を実現した。大南組、大南コンクリート工業社長。

伊藤 直訳というわけではありませんが、外壁をガラス張りにして見通しがきくように設計しました。ただ、ガラスの壁だけだと境界として強すぎるので、周囲を縁側で囲っています。

隅田 この縁側は、地域の人と交わるポイントになりました。ふつう、社員でもなければオフィスに用事はありませんよね。だから、用がなくても来やすい仕掛けをつくりたくて、縁側をつくってほしいとお願いしました。こんな大きな縁側になるとは思っていなかった(笑)。

伊藤 人が集まる場所を考えていましたからね。昨日も大にぎわいでしたね。
隅田 ええ、昨日の七夕祭りには近所の人たちが200人近く集まりました。縁側が大活躍でした。

——イベントがなくても、人は来るのでしょうか。

隅田 ここは、寄井座がある隣の土地のオーナーと話をし、門を設けず誰でも通り抜けができるようにしたんです。そのおかげで、いろいろな人がどんどん入ってきます。

大南 中にも入れてもらえるから、まさにオープンだし、シームレス(笑)。

隅田 人に見られている状況は、クリエイティブワークにとつてよい刺激になる、という話を聞いたことがあります。本当かどうかわかりませんが、少し信じているんです。本来人間は囲われた場所にいたがる本能があると思いますが、本能とは逆だからこそ刺激になり、創作にもよい影響を与えているのだと思っています。また、中が丸見えだと、地域の人があまり疑心暗鬼になりません。よそから来た企業が中で何をやっているのかわからなかったら、すごく不安になるでしょうから。

「社会資源の発掘」は、あくまで結果

——いろいろな企業や移住者の受け入れをするに器が必要になると思います

が、そのときに空いている古民家を利用するのは、今回のテーマである「社会資源の発掘」になっていきますね。

大南 もし仮にお金がたくさんあるのであれば、新しい建物を建てて企業や移住者の誘致をしてもよいのではないのでしょうか。たまたま僕らは民間で活動をしているので、政策的なお金は使えませんから、できることに限界があります。だから、空き家を紹介するしかない。

隅田 「えんがわオフィス」に改修する前の古民家は、恵比寿のオフィスの1カ月分の家賃よりも安い値段で買いましたから。実際に古民家を購入した側の立場からいえば、買ったのは単純に価格が安いという理由でした。手もちの流動資金で買えてしまえるわけですから。東京のオフィスだと、そうはいきません。高級車だったら、車より安い(笑)。

大南 改修には、車何台分もかかっているでしょ(笑)。

隅田 そう、改修には1億円くらいはかかっています。設備に半分、建物に半分。ただ、設備コストはどこだろうとかかるものです。逆に都心のビルを借りてオフィスにしていたら、原状回復をしなくてはならないでしょうから、そちらのほうが大変です。

伊藤 僕は、お金がないということも、空き家が残っているということも、やはりマイナスということではなくて、ひとつのコンテクストというか、付き合っていくべき状況だと思えます。

何が「社会資源」なのか、というのはケース・バイ・ケースで、実際はすべてが資源だと思っています。その資源にどれだけ気がついて、どれだけ採取できて、どれだけ編集できて、どれだけ構築できるのか、ということが大事だし、一番おもしろい。こういう資源はこう活用しよう、というメソッドはありません。お金がないということすら、ひとつの資源かもしれませぬ。

——結果的には、日本中にたくさんある木造建築の未来を感じさせるプロジェクトになりましたね。



写真2点提供／えんがわ

えんがわ
オフィス
イベント

「えんがわオフィス」では、社員だけでなく数多くの近隣住民も参加するイベントが催されています。写真右／七夕祭りの様子。縁側には地域住民が腰掛けている。左／オフィス前の広場に多くの人が集まっている。



休み時間に
縁側でくつろぐ
「えんがわオフィス」のスタッフ。

写真提供/えんがわ

大南 もともと木造建築は数十年後には壊すという前提で考えられてきましたが、それ以外の道もあるということを見せた意義は大きかったと思います。これからは木造の可能性を建築家自身もきちんと伝えていく必要があって、木造でもしっかりと残る、むしろ時代を経るごとにどんどん価値が上がっていく、という考えを広げていってほしいと思っています。

伊藤 この「えんがわオフィス」ができたときに、こんなふうに直るんだったら古い家もいいなみたいなことを、近所の人が言ってくれたそうですね。以前の経験を思い返すと、社会貢献って、それを目指すと空まわりしてしましますが、今回は結果的に何か少し貢献できたかもしれません(笑)。

大南 大丈夫、地域の人は気づいていますよ。

順調に過疎化していく

—— 神山町の「創造的過疎」は、今後どういう方向にいくのでしょうか。

大南 順調に過疎化していくと思います(笑)。ただ、若い世代をあまり減らさないことを目標にしています。たとえば、これから20〜30年後に小学校の1学年に20人はいる町をつくりたい。今は20数人くらい。これを実現するた

めには、たとえば子どもふたりの4人の家族を年間5世帯受け入れる必要があるという計算になる。その目標のために準備をしているんです。人口は減りますが、町の体質を筋肉質に変えていきたいと考えています。

また伊藤さんたち建築家や、隅田さんたちのような企業が入ってくることで、明らかに町はおもしろく、楽しくなっています。過疎というマイナス面を、やはりプラスにとらえていかないと。

隅田 最初に大南さんが言われたように、地理、景観、あるいは産業や物価などのことでいえば、神山はどこにもある普通の田舎だと思えます。やはり僕が神山で魅力的に感じたのは、「人」なんです。ここに住んで、この人たちと暮らしたら、おもしろいだろうな、と思ったのです。大南さんたちのスタンスが築いた土壌ですね。

—— 建築には、こういった役割が担えるのでしょうか。

伊藤 建築にできることはさまざまだと思いますが、重要なのは建築ですべてを解決しようと思わないことだと思います。最初に建築をとおして社会貢献をしたかったと言いましたが、それはとてもおこがましかったと感じています。「貢献したい」みたいな想いが先に立つと、どうしても建築の手柄にしたというか、いろいろなことを引き受けてイニシアチブをとりたくなくなってしまうのですが、それよりもそこで起きていることとか、そこにいる人たち、そこにあるネットワークを観察して、建築がその「一部」になればいい。いろいろな人がそれぞれ楽しく豊かに生活できるというのが、きっといい社会だと思いますが、建築はその傍にそっとある、くらいのほうがうまくいくんじゃないかと思っています。

神山に来ると誰と話してもいつも学ぶことがあります。本当におもしろい。

（株）えんがわ
代表取締役
社長

隅田 徹



Sumita Tetsu

すみた てるつ / 1962年大阪府生まれ。1987年慶應義塾大学経済学部卒業後、日本ケーブルテレビジョンに入社し、CNNニュースの配信事業に従事。2002年プラットイーズを設立し、メタデータ(番組詳細情報)の配信などを行う。13年神山町に「えんがわオフィス」を開設。同年えんがわを設立し、4K8K映像の配信などを行う。プラットイーズ取締役会長、えんがわ代表取締役社長。

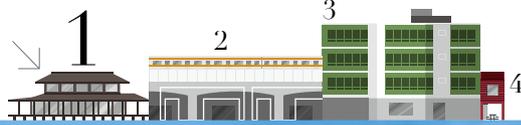
BUS

設計

伊藤 暁 + 須磨 一清 + 坂東 幸輔

作品

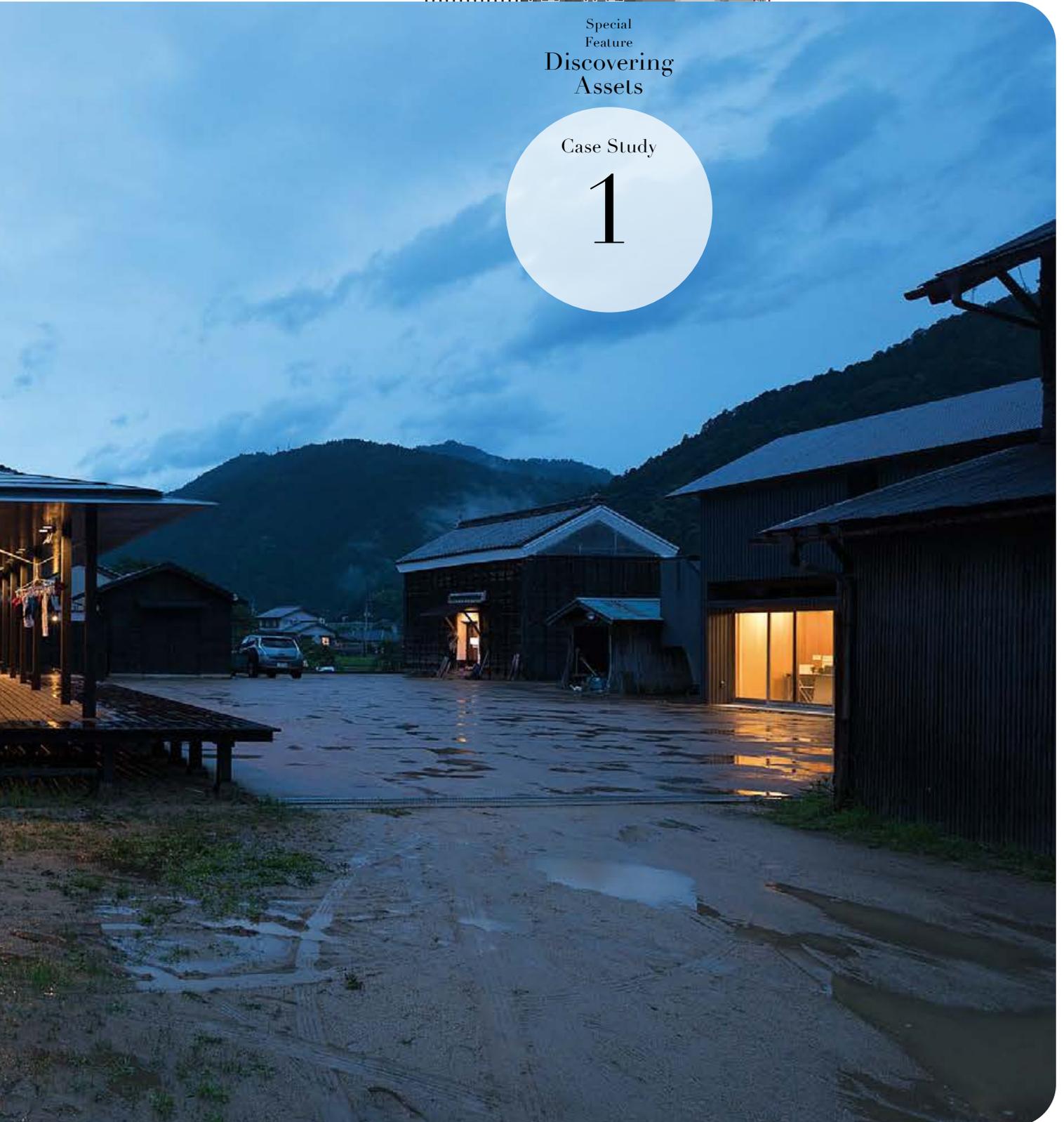
えんがわオフィス



Special
Feature
Discovering
Assets

Case Study

1



地域に溶け込む古民家オフィス

田舎の商店街の一面に立ち、空いていた古民家を再生したベンチャー企業のサテライトオフィス。広い縁側とガラス張りが特徴の建築が、地元の人と企業の距離を近づけている。築80年ほどの古民家や蔵が新しい役割を担い、継承された。

えんがわオフィス

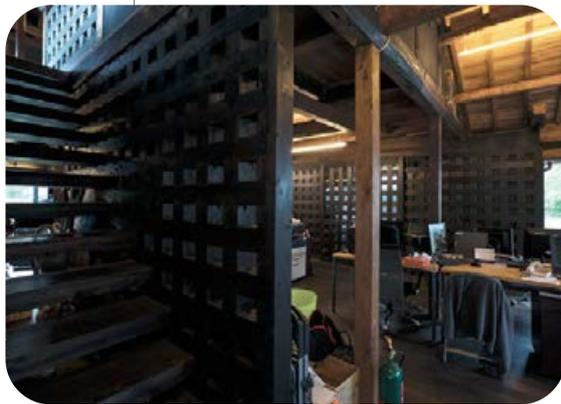


隣の敷地から見た夕景。左手にオフィスになっている母屋棟、右奥にもうひとつのオフィスである蔵棟、右手前に映像のアーカイブ棟がある。



1階中央の階段まわり。階段の格子状の壁が、耐力壁として機能することで、周囲の壁にブレースなどが不要な構造計画になっている。

1階ワークスペース。映像の制作、編集、配信などの業務が行われているため、テレビ番組などがモニターに映し出されている。



既存の間仕切り壁が取り払われ、ワンルームのオフィスになっている。周囲がガラス張りのため、地域に対してオープンに。

もともと本社は東京のビル街にあり、代表の隅田徹さんはいつそのことまった

「えんがわオフィス」のオーナーは、東京に本社を構える映像配信のベンチャー企業であり、そのサテライトオフィスがこの神山町に建てられたのである。このオフィスはふたつの役割もっている。ひとつの役割は、地震など大規模災害が発生した際にも業務を継続できるためのリスク・ヘッジにある。そして、もうひとつの役割が、社員が働く環境に自由を与えようというものだ。都会のオフィスで働くのが性に合っている人もいれば、それでは息が詰まるという人もいる。この企業では、社員は自分が働く場所を、東京でも神山でも自由に希望を出せる。

働く場所を社員が選べるように

この勝手口とも呼べる存在が、「えんがわオフィス」にはある。なお、建築家にとっては思いもかけず、その勝手口は今や客人も迎える正式な玄関となってしまったのだ。

日本の住まいから、「勝手口」が消えつつある。いつからだろうか。少なくとも昔の民家には必ずといっていいほどあったはずだ。表の玄関はおもに客人向けであり、勝手口は家族にとつての日常的な出入口でもあった。漫画『サザエさん』で、「三河屋です！」と生活にすっと入ってくる御用聞きの子ちゃんという存在は、とても気持ちのよい信頼関係を感じる一場面である。

Before



母屋棟



閉鎖的な印象の既存家屋。縁側は、廊下として使われていた入側縁で、周囲に開放されたものではなかった。

蔵棟



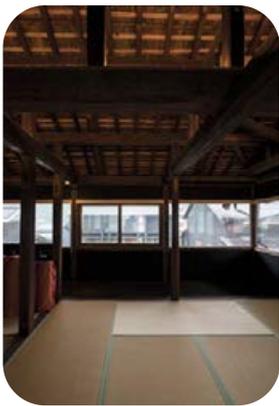
蔵は隣地の火事の影響で、漆喰や下見板が解体され、西側の土壁が露出していた。母屋・蔵ともに築80年ほど。

写真2点提供／伊藤 暁



Special Feature
Discovering Assets
Case Study

1



2階の和室。小屋組が現しになった古民家らしい空間。来客の際のゲストルームなどに用いられている。

く違う環境を、と地方の田舎をめぐる場所探しをしていたという。そんな折、偶然つけたテレビで神山町と出会う。そこには川に足をつけながらパソコンで作業をしている人が映っていたのだ。そうした風景に惹かれ、改修をお願いする建築家を決める前に、まずは古民家の購入を決定したのだという。

山が強くしたネット環境

映像を相手にしたこの企業では、インターネットの高速化によって、データ容量を気にせず仕事の納品がネット経由でできるようになり、取引先に足を運ぶことも少なくなっていた。しかし、求められるのはインターネットのスピード。じつは、その点においても、山間地域である神山町の独自の事情が生み出した、強みがあったのだ。

地上デジタル放送が開始されるにあたって、山に囲まれた地域では、場所によってその電波が届かない可能性があった。そこで徳島県では「全県CATV網構想」を推進し、ケーブルネットワーク網とともに高速ブロードバンド網の整備が行われた。その結果、なんと東京よりも速いネット環境が整ってしまったというわけである。すでにオフィスは場所から解放されていた。

地域に対してオープンな場所に

また神山町は、以前からアーティスト・イン・レジデンスな

どを長年行ってきたかきもあり、町の人
が外からの人を受け入れる雰囲気、す
でにできていたようだ。「しかし、やはり
外から来た人は異分子であることに変わ
りはない」。そう話す隅田さんは、オフイ
スも地域に対してオープンな場所にした
いという希望があった。「オープン&シー
ムレス」、それがこの企業の理念でもあっ
たのだ。

そこで、改修を任せられることになっ
たのが、BUSであった。BUSは建築家
の伊藤暁、須磨一清、坂東幸輔の3氏に
より組織されるグループの名称である。
普段は、個々に設計事務所を主宰しつつ、
設計活動だけでなく、ワークショップや
フィールドワークなどの活動も行ってきた。
2010年に学生とのワークショップ
によって改修した「ブルーベアオフイ
ス神山」を皮切りに、16年現在までに7
つの建築を手がけてきた。

「えんがわオフィス」も、そのうちのひ
とつである。計画にあたっては、まず木
造の家屋から軸組を残し、外に対する壁
はなくし、ガラス張りにすることを提案
した。しかし見えることと、親しみをも
ってもらうことは違う。そう感じた建築
家は、建物をぐるりと一周する、「えんが
わ」を計画したのだ。

台所と一体化した 「えんがわ」

しかしこの「えんがわ」、いわゆる民家
でイメージする「縁側」とは似て非なる
ものである。ふつう、縁側はせいぜい居
間のまわりにめぐらされるものであり、

四周すべてが縁側などあり得ない。さら
には、随分と奥行きもある。2m以上あ
るところも。そもそも縁側に土足で上が
ることなどない。

テラスとも異なるこの存在は、もはや
「えんがわ」としか呼び方がなさそうだ。
この広い「えんがわ」は、既存の民家の
軒がぐっと伸びた屋根で覆われている。
そこには外とも中ともつかない場所がつ
くられている。これには、「えんがわ」に
接した台所の存在が大きい。じつは冒頭、
「勝手口」と呼んだものは、「えんがわ」か

縁側から北側の敷地全体
を見る。縁側は2,820mm
もの奥行きがあり、テラ
スのように多用途に活用
されている。



Special
Feature
Discovering
Assets
Case Study

1

ら台所に通じる出入口を指している。
そもそもオフィスで台所の話は似つか
わしくないが、「えんがわオフィス」には
立派な台所が備わっている。食べる場所
は、どの時代にも住宅の隅に追いやられ
ることはなかった。昔ながらの民家でも
団地でも、今のマンションを見ても、ど
れも食べる場所は生活の中心でありつづ
けてきた。仕事場の台所としては充実し
たこの空間は、内部空間だけで見ると隅
に位置している。

を一体に考えてみよう。すると、台所の
見方がガラリと変わる。じつは「えんが
わ」と内部のちようど中心に位置してい
ることに気がつくからだ。「えんがわ」は、
まるでリビングスペースのようだ。ここ
に在ると、まるで中にいるような気持ち
にさせるのは、この台所が「えんがわ」
にも向かって開かれており、シームレス
なつながりを生んでいるからではないだ
ろうか。

北側外観。既存の瓦や、
もともとの古民家のプロ
ポーションが活かされ、
周囲の風景となじんでい
る。



客も社員も 勝手口から入る

正式な玄関として本来設計された道路側の入口は、あまり使われることがないという。すっかり勝手口にその座を明け渡してしまった。つまり、ここを訪れる客人は最初から御用聞き「サブちゃん」と化してしまうのである。初めての人も地元の人も、もちろん社員も、分け隔てなく中庭に入り、この勝手口から中に入る。しかし、その行為にあまり違和感なくすつと入り込める。それは、「えんがわ」に立った時点で、すでにこの建築の中に入り込んでいるからかもしれない。いつものまにか自然と建築に入り込む仕組みこそ、「えんがわ」が生み出した効果であり、この建築最大の魅力ともなっている。

この、「えんがわオフィス」を「古民家改修」と言っているのかもしれない。いささか抵抗がある。たしかに既存の屋根や柱はそのまま生かされている。しかし、天井近くにブラリと設置されたディスプレイの数々は、建物の古さとの対比によって近未来の感さえ漂わすほどだ。既存の民家にとられることなく、新しい価値観によって元の姿から解放されたことが、古いにもかかわらず見たことのない建築を生み出している。

異分子がもたらす 新しい価値観

こうしたネットを介してやり取りされる仕事では、東京でも徳島県神山町でも、変わらない仕事求められる。つまり田



舎で仕事をすることを求めているのは、社員自身なのである。大事なことは、社員が自らを置く環境と、神山町との接し方なのかもしれない。

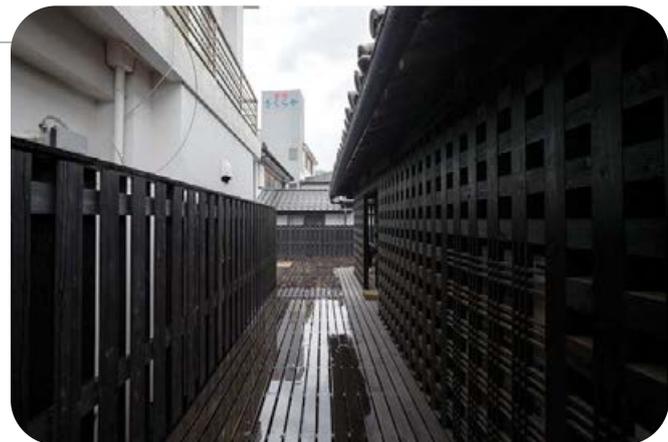
現代は、今まで「ないものねだり」と思っていたものが、ふと可能になる瞬間がある。これまで東京の企業は、山の中のオフィスなど考えもしなかったことだったろう。またそれは、逆の立場である地方にとっても同じこと。こうした異分子の存在が、神山町から新たな価値観を発信するきっかけになりはじめている。

日本各地では、いまだに多くの公共建築の建設に、地方の活性化が託されている。一方で、「えんがわオフィス」をはじめとした神山の活動には、そうした気負いは感じられない。神山町での生活を楽しむ姿に、眠った社会資源を再発見する方法を垣間見た気がする。



台所の後ろにある勝手口。北側の広場に面している。社員も地元住民も、この勝手口から出入りすることが多い。

南側の玄関まわり。前面道路からつづく縁側を通過して、玄関に至る。右の格子状の壁は耐力壁になっている。

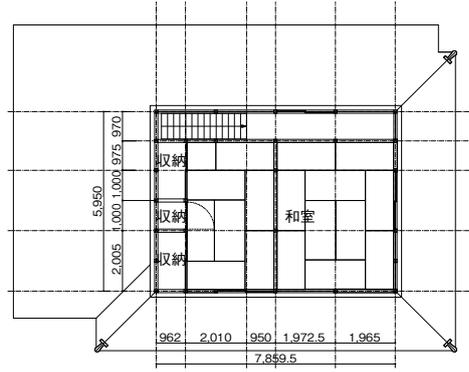


平面図



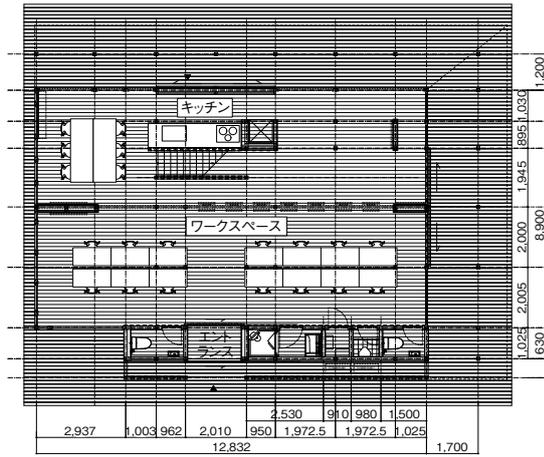
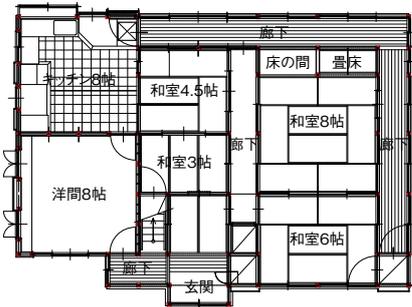
0 1 2m

1/250



2F

改修前1F

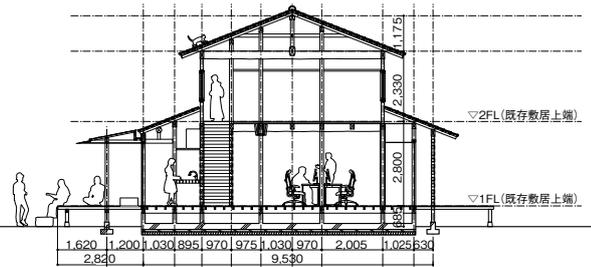
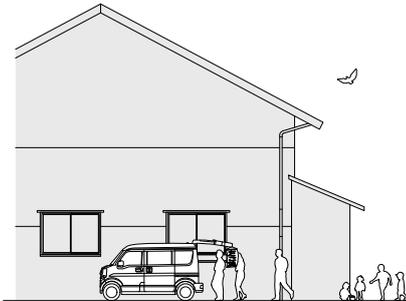


1F

断面図

0 1 2m

1/250

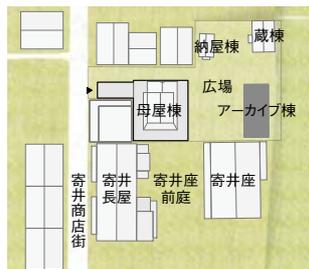


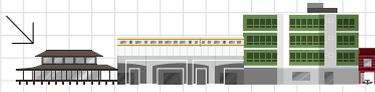
配置図



0 20 40m

1/2,000





Special Feature
Discovering Assets
Case Study

1



隣地から見た東側外観。

「えんがわオフィス」

建築概要

所在地	徳島県名西郡神山町神領字北88-4
主要用途	事務所
建主	プラットイーズ
設計	伊藤暁+須磨一清+坂東幸輔 /BUS
構造設計	なわけんジム
構造	木造
施工	和田建材
階数	地上2階
敷地面積	1,113㎡
建築面積	114.2㎡
延床面積	161.0㎡
設計期間	2012年10月～2013年1月
工事期間	2013年1月～7月

おもな外部仕上げ

屋根	既存瓦葺き
外壁	土壁の上、黒漆喰塗り
開口部	鋼製建具

おもな内部仕上げ(ワークスペース)

床	クリフローリング t=15mm
壁	スギ板張り、カラーガラス張り
天井	既存



伊藤 暁

Ito Satoru

いとう・さとる / プロフィールは7ページ参照。

BUS

おもな作品 (神山町) = 「ブルーベアオフィス神山」(10、須磨一清+坂東幸輔の共同設計)、「KOYA」(15、須磨一清の設計)、「WEK 神山」(15、伊藤暁+須磨一清+坂東幸輔の共同設計)



写真提供 / 須磨一清

須磨一清

Suma Issei

すま・いっせい / 1976年東京都生まれ。99年慶應義塾大学環境情報学部卒業。2002年コロンビア大学建築修士科卒業。04～07年ROCKWELL GROUP勤務。07～10年VOORSANGER ARCHITECTS勤務。10年BUS設立。11年SUMA設立。



写真提供 / 坂東幸輔

坂東幸輔

Bando Kosuke

ばんどう・こうすけ / 1979年徳島県生まれ。2002年東京藝術大学美術学部建築科卒業。02～04年スキーマ建築計画。08年ハーバード大学大学院デザインスクール修了。09年ティーハウス建築設計事務所。10年坂東幸輔建築設計事務所、BUS設立。10～13年東京藝術大学教育研究助手。15年京都市立芸術大学環境デザイン専攻講師。



↓蔵棟のオフィスから外を見る。窓の外には、神山町の田園風景が広がっている。

↑改修後の蔵棟。土壁が露出していた西側の壁面(12ページ参照)がカーテンウォールになっている。





Special
Feature
Discovering
Assets

Case Study

2



リライト

企画・設計

靱山真人 + 古澤大輔

作品

中央線高架下プロジェクト

コミュニティステーション東小金井+モビリティステーション東小金井



コミュニティステーション東小金井

JR東小金井駅の武蔵境駅側の高架下を利用してつくられた「コミュニティステーション東小金井」。広場を挟んで、飲食店、コンビニなどが並ぶ。

特集／社会資源の発掘／2

高架下の土地を生かす

都心の各所で高架下の活用が進んでいる。糀山真人さんや古澤大輔さんたちが主宰するライトでも、エリアマガジンを発行して地域と密着するところからはじめ、運営にもたずさりながら、中央線の高架下に飲食店などが入る複合施設を企画し、設計した。その多面的な活動に注目する。



遊歩道と高架下の境には、鉄骨のフレームが設けられている。低く抑えた建物と高架とのあいだに向こう側の空が見える。



Special Feature
Discovering Assets
Case Study

2

フレームは100×50mmの
スチールフラットバー。
記号化された扉が、各店
舗の入口のサインにもな
っている。フレームは法
規上、工作物扱い。



週末の昼下がり、JR東小金井駅から200mほどの高架下の広場には、ロックボーカーが響きわたっていた。そして近郊の食材を集めたマルシェのにぎわい。土木スケールの力強い柱脚が延々と続くなか、ここ「コミュニティステーション東小金井」と「モビリティステーション東小金井」は、仮設建築のような軽快でかわいらしい表情を見せる。
榎山真人さんと古澤大輔さんにその設計プロセスをうかがった。

沿線価値 向上のための コンサルティングから

JR中央線の三鷹〜立川間にはかつて18カ所の「開かずの踏切」があり、交通渋滞を引き起こしていた。その解消のため十数年にわたり進められた高架化工事が、2013年に完了。同時にそこには、長さ13・1km、約70000㎡もの広大な空き地が出現した。

高架下の利活用を目的として設立された「JR中央ラインモール」では、この場所を沿線の価値向上にどう結びつけるかを求めている。それに対し彼らは、プロジェクト全体のマネージメントと、地域にどう入り込んでいくかというコンサルティングから関わった。

まず、無料のエリアマガジン「のわ（『武蔵野の輪・和』の略）」を発刊。地元食材にこだわった飲食店や雑貨店など、古くから住む人も知らないようなところを発掘し、ユニークな活動を続けている地域のキーパーソンを紹介していった。

そしてこの冊子を手に地域をまわることで、周囲の人々を巻き込んでいくためのドアノックツールにもなった。「のわ」は駅のラックのほか、100カ所ほどの店舗にも置かれ、毎月3万部を24号まで刊行することになった。

次にそのキーパーソンによるトークイベントを毎月開催し、地域活動に高い意識をもつ人たちを集めていく。最初は20〜30人だった聴衆が、文化人などをゲストに呼んだ対談形式とすることで、100人規模にまで広がったという。

また同時に「地域ライター活動」を行った。地元のライター希望者を募集し、勉強会を毎月開き、自らの企画によるウェブ記事を書いてもらった。荒削りでも想いのこもった記事は、共感を得てSNSで拡散されたそう。

そして、こうしたサークル活動的なアクションの受け皿となるような場を提案していく。それがひとつのかたちになったのが、この商業施設「中央線高架下プロジェクト」だ。

運営にかかわる 建築家たち

その開発にあたって、彼らは事業収支からかかわり、地域の魅力につながるお店を誘致すべく積極的な行動をとった。

というのも、一般的なJRの駅型商業開発では、費用を捻出するために賃料が高めに設定される。するとテナントはナシヨナル・チェーンストアばかりとなり、どここの街も同じ顔になってしまう。そこで「コミュニティステーション」の約半



分の区画（コミュニティ区画）を彼らがいったん借り上げ、小規模な事業者にそれぞれ貸し出した。彼らは、JR中央ライオンモールから見れば店子であり、各テナントから見れば大家なのである。

さらにこの「コミュニティ区画」については、初期費用を抑えるために、あらかじめ内装工事を施し、賃料もなるべく低く設定して、出店へのハードルを下げた。その結果、前述の「のわ」に登場したクリエイターがテナントに入った。

その多くは工房兼作業場を自宅にもつていた人たちで、待望の初出店となる。また、彼ら自身も「ヒガ

コブレイス（ヒガコは東小金井の略）」というフリーペーパー・ライブラリーを自主運営している。

つまり彼らは業務を委託されているのではなく、テナントの代表でもある。そのため、

事業主のJR中央ライオンモールに対して、こうした場を維持する運営についてスムーズな交渉が行えるわけだ。

たとえば開業1周年には「家族の文化祭」（15年11月1日）という子育て世代向けのイベントを開いた。彼らが運営の中心となってテナントと連動し、音楽ライブ、フードやクラフト、ワークショップなど30店舗が出店して、3000人を集めたという。その後も同イベントは、テナント自らが実行委員会をつくり、その世界観を保ちつつ半年に一度のペースでつづけられている。

明るく開放的な 高架下施設

建築の具体的な特徴を見ていこう。「高架下の建物は外部が見えず、一般に閉鎖的。まずは開放的な施設にしたかった」と古澤さん。そこでファサードと本体を分け、本体は48個の20ft型コンテナで構成した。住宅スケールにポリウムを抑えることで、高架とのあいだに反対側の空まで視線が抜け、昼間でも暗いという高架下施設のイメージを払拭する。また各テナントからの要望に対し、コンテ

Before



写真提供/リライ

開発前の高架下。鉄道の高架下とはいえ、通常の建築基準法が適用される。建ぺい率や高さ制限も通常どおり。高架や太い柱は建物と縁を切り、ないものとして検討しなくてはならない。

ナのモジュールにより「コンテナ何個分」などと合意形成が容易になり、同時に、前記の小規模なテナントの賃料を抑えることにもつながっている。

そして外観を特徴づけているのは、無垢のスチールによるフレームファサードだ。歩道と施設をゆるく区切り、内外のあいまいな空間をつくって、高架下に統一感を生む。大小の開き戸をモチーフとする白いフレームは、コンテナの黒い扉と対をなし、ショッピングモールの楽しさを演出している。ここはセミパブリックスペースで、通常はそこに面したテナ



写真上／東小金井駅の武蔵小金井駅側にある「モビリティステーション東小金井」のカフェ。中上／「コミュニティステーション東小金井」の広場。さまざまなイベントが催される。中下／店舗の外部展示スペース。下／回遊性のある歩行空間に生まれ変わった高架下。

ントが飲食の場などに使い、イベント開催の折には広場と一体になって別の屋台が出店することもある。空間の余白を生かしたシステムは、13・1kmの高架下全体に展開できる拡張性を秘めている。

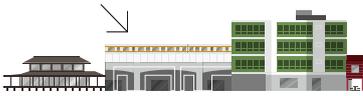
専門家のチームによる まちづくり

おふたりの話から感じるのは、建築をよいかたちで持続させる方法を考え実行していく強い姿勢だ。このプロジェクトに関していえば、場所の特性を生かして地域に根ざした文化を進展させ、そのために事業の採算を確保しつつけること。そのビジョンの明快さと行動力は、従来の設計事務所を軽々と超え、新しい社会資源には新しい組織が必要なることを実感させる。

会社勤めで企業向けのコンサルティングをしていた榎山さん。馬場兼伸さん、黒川泰孝さんとともに設計事務所メジロスタジオを率いていた古澤さん。さらに、デザイン会社を経営していた酒井博基さん。3人は、ラジオ番組の運営（東京ウエブサイ）、不動産ウェブサイ（立川空想不動産）、コミュニティカフェやシェアオフィスの改修・運営（シネマスタジオ）などの課外活動的なプロジェクトで協働していた。そしてそれぞれに異なる立場で仕事をする一方、まちづくりに積極的にかかわれる事業体を模索してきた。現在の組織・リライトは、コンサルティング、建築、編集、空間プロデュースという4つのバックグラウンドをもつチームからなり、「街と人をつなぐ」メディアとしての場」をつくっている。「たとえば建築家のような専門家も、前提の整理から一緒に考えていく。そして

2

Special Feature
Discovering Assets
Case Study

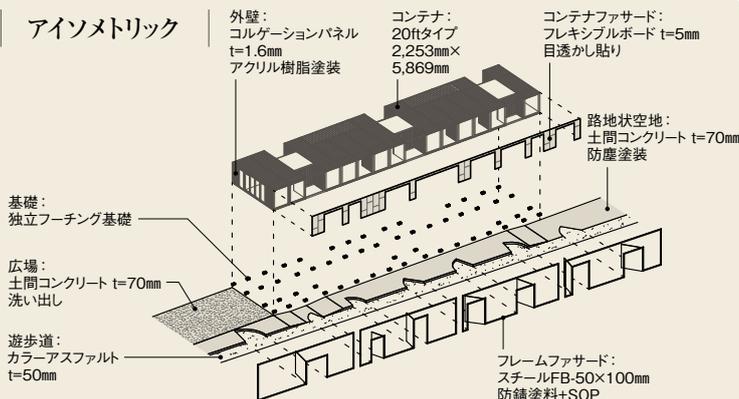


結果にコミットしやすいチームづくりを目指す」と榎山さん。それは、「エンドユーザーに迎合することなく、彼らを巻き込んで新しい建築をつくりたい」という古澤さんの考えていた方向性とマッチするものだった。

この駅が生まれたのは1964年であり、東小金井は新しい街だ。榎山さんがイメージする住人像は、緑のある環境を求め、手づくりのものを評価し、自宅兼工房でものづくりに励む、子育て世代の人々。今回、テナントに参加したのもほぼ30代の若い人々だという。

「街に愛着をもちはじめた人たちの触媒となるような場所に」と榎山さん。「地域の居間をつくりたい」と古澤さん。この高架下に近所からのママチャリがずらりと並んだ風景は、活気ある新しいまちづくりを予感させてくれる。

アイソメトリック





「コミュニティステーション東小金井」。2.850mmの高さのコンテナが、高架下の内部に挿入されている。明るく開放的なセミパブリックスペースが連続する。



コンテナ内部のカフェ。天井を張らずに十分な高さを確保。店舗内部を横断できるプランニングとなっている。また外部のスペースもテナントが利用できる。



写真上/サイクルポートとカフェが人と街をつなげる「コミュニティステーション東小金井」。下/広場を中心に

地域の人たちが主役とした商業施設「コミュニティステーション東小金井」。

「中央線高架下プロジェクト」

コミュニティステーション東小金井+
モビリティステーション東小金井

建築概要

所在地	東京都小金井市梶野町5 (コミュニティステーション東小金井) 東京都小金井市緑町1 (モビリティステーション東小金井)
主要用途	物販店舗、飲食店舗
建主	JR中央ラインモール
設計	古澤大輔/リライト_D
企画	榎山真人/リライト_GROUP 酒井博基/リライト_C
構造設計	ウエルストーン設計
構造	鉄骨造
施工	菊池建設
階数	地上1階
敷地面積	1,638.61㎡ (コミュニティステーション東小金井) 490.00㎡ (モビリティステーション東小金井)
建築・延床面積	520.06㎡ (コミュニティステーション東小金井) 173.16㎡ (モビリティステーション東小金井)
設計期間	2013年6月~2014年5月
工事期間	2013年5月~2014年10月

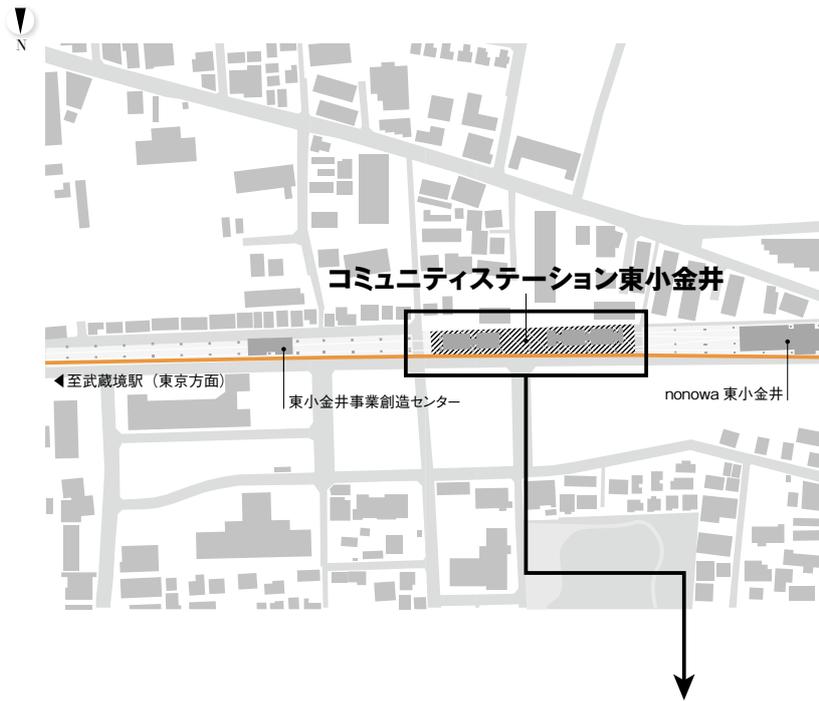
おもな外部仕上げ

屋根	コルゲーションパネル t=1.8mm アクリル樹脂塗装 ウレタンシールの上、 アスファルト防水(ジョイント部分)
外壁	コルゲーションパネル t=1.6mm、 フレキシブルボード t=5mm
開口部	アルミサッシ

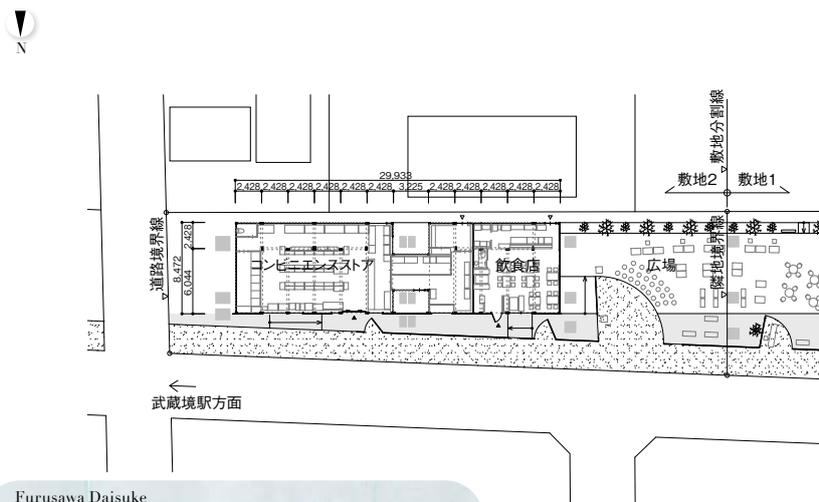
おもな内部仕上げ(店舗)

床	スギ足場板 t=35mm
壁	ラワン合板 t=9mm ウレタンクリア塗装
天井	結露防止塗料

東小金井駅周辺



平面図



古澤大輔

もみやま まさと

ふるさわ・だいすけ/1976年東京都生まれ。2000年東京都立大学工学部建築学科卒業。02年同大学大学院修士課程修了後、メジロスタジオ設立。10年リライト参画。13年メジロスタジオをリライトデベロップメント(現リライト_D)へ組織改編。現在、リライト_D取締役、日本大学理工学部助教。

もみやま・まさと/1976年東京都生まれ。2000年東京工業大学工学部社会工学科卒業。02年同大学大学院修士課程修了。02~09年アクセント。08年リライト設立。10年建築・不動産事業部を分社化(現リライト_D)。現在、リライト_C、リライト_D代表取締役。

おもな作品=「東府中の集合住宅」(10、メジロスタジオとして)、「瀬田の住宅」(11、メジロスタジオとして)、「十条の集合住宅」(16)



Special
Feature
Discovering
Assets

Case Study

3

鍵屋の階段



403architecture [dajiba]

設計

彌田 徹 + 辻 琢磨 + 橋本健史

プロジェクト

カギヤビル・三展ビル・渥美マンション

カギヤビル

浜松の中心市街地にある築50年以上のRC造4階建ての雑居ビル。複数の権利者が共同して所有している「共同建築」のため、建て替えが難しくいま、空洞化が進んでいた。

鍵屋の敷地

鍵屋の基礎

特集／社会資源の発掘／3

空洞化ビルのモザイク・リノベーション

彌田徹、辻琢磨、橋本健史の3氏は、浜松の中心市街地においていくつものリノベーション作品を手がけてきた。それら一つひとつもアイデア豊かだが、いずれも半径500mほどの徒歩圏内のビルにモザイクのように散在し、全体で街をもじわじわと活性化。空洞化していたビルが、生まれ変わろうとしている。

「カギヤビル」はJR浜松駅から北西に徒歩10分ほどの交差点沿いに立つ雑居ビル。戦前のレトロ建築のような凝った意匠はなく、むしろ意識しないと見過ごしてしまいうような建物だが、よくよく観察すると、築50年以上を経たスチールサッシやガラスブロックが味わいぶかい。戦時下の空襲で壊滅的な被害を受けた浜松では、復興にあたって大通り沿いを防火帯にするために複数の権利者が集まり、「共同建築」と呼ばれる鉄筋コンクリート造のビルが大量に建てられた。だが権利関係が複雑なゆえに建て替えが進んでおらず、とりわけ浜松は老朽化した共同建築が数多く残り、市街地の空洞化が問題となっている。「カギヤビル」もそのひとつだったが、現在は16室中、空きは1室のみ。テナントにはあか抜けたアパレルショップや雑貨店、ギャラリーが入り、恵比寿や目黒にでもありそうな、感度の高い人気スポットとなっている。いったい何が起きているのか。

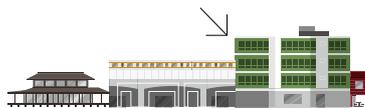
敷地を設計するという発想

始まりは2012年。このビルを購入した地元の不動産会社は、ボロボロな状態の建物に最低限の手を入れてスケルトンにし、若いクリエイター向けに貸し出した。床も壁もコンクリートむき出し、ガス水道も共用部までで、内装は好きなだけ自由にできて原状回復の義務もない。4階にギャラリーを設け、2階に地元出身の人気写真家・若木信吾氏がオーナーの書店が入ると、そこに入出入りする人々

やイベントなどを通じて評判が広がり、やがてテナントはほぼ満室となった。

この復活劇で重要な役割を担ってきたのが、浜松を拠点に活動する設計事務所403architecture [dajiba] (以下、403と省略)である。「カギヤビル」内に「鍵屋の敷地」「鍵屋の階段」「鍵屋の基礎」の3つのテナントの改装を手がけている。それにしても、敷地とか基礎とか、なぜこんな不思議なネーミングをするのか、という疑問は、現地を訪れてすぐに氷解した。確かに彼らは建築空間の部分を設計しているのだ。たとえば「鍵屋の敷地」。これは店内を小分けにして、商品を置くスペースを月極で貸す「ニューショップ浜松」の内装だが、403がデザインしたのは、杉材の頂部に100mm角のタイルを貼った、面積も高さもまちまちの展示用什器。出店希望者はタイルの枚数につき月100円(諸経費別)という手軽な賃料で極小ショップのオーナーになれる仕組みだ。これは建築の内部に「敷地」を借りるという「発想の設計」といえる。什器のデザインでありながら、従来のモノの見え方が変わってくる。そんな小さな驚きがこの空間には仕掛けられている。

「鍵屋の基礎」は洋服をリメイクして販売するアパレルショップ。ここでも403が設計



Special Feature
Discovering Assets
Case Study

3

したのは、コンクリートブロックとガラスに囲まれた小空間のみ。その内部はミシン作業スペースとなっている。通りから見ると、店舗内に「小さな工房建築」が差し込まれ、まるでDJブースのように、街行く人が古着をリメイクする店主の手さばきを見物することができると。「鍵屋の階段」は、シェアスペース用の部屋に階段状の構造体を挿入。踊り場に当たる部分を宙吊り構造にしてダブルベツドサイズのロフトに仕立て、遊び心たっぷりのスペースを創出している。

いずれの計画も手を加える要素は最小限でありながら、既存建物のもつポテンシャルを「建築的な変換」で向上させようという意思を感じさせる。

小さくてもいい自分の手でつくる喜びを

403は、横浜国立大学の同期生だっ

築50年ほどのRC造2階建ての雑居ビル。はす向かいのカギヤビルと同様に「ゆりの木通り商店街」という目抜き通りに面して立っている。

三展ビル

た彌田徹さん、辻琢磨さん、橋本健史さんの3人が集まって11年に設立。きっかけはその前年に開催された第1回浜松建築会議での出会いだった。「カギヤビル」から大通りをはさんだ向かいに立つ「三展ビル」の空き室を使ったワークショップに携わっていた3人は、隣室で美容室を営む林久展さんと知り合う。こちらも築50年超の老朽化したビルだが、美容室内は年季の入った中古家具と観葉植物がよい具合にマッチして、すこぶる居心地がいい。ここは工作好きな林さんが古い家具を集めてきてはアレンジし、コッコンと自作してつくり出した空間。室内にはスケボー板を再利用したプランコヤ、跳び箱にキャスターを付けた本棚など、自由な発想から生み出された個性的な家具であふれている。

浜松出身の辻さんは当時、横国大の大学院を修了したものの就職せず、このまま東京の設計事務所へ勤めたいという気持ちで悩んでいた。そこに、肩肘張らずに自分のやりたいことで自由に生きている林さんと知り合い、こういう生き方もいいなと思つたという。同じ大学院で学んだ橋本さんはいとうと、横浜港の敷地に巨大コンプレックスを計画、といった都市的なスケールの研究をしてきたこともあり、その反動で、小さくてもいいから自分たちの手でつくることから始めたいと考えていた。彌田さんは大学院から筑波大に進んだが、住んでみると横浜よりもむしろ魅力的で、これからは地方都市がフィールドとしておもしろいと考えていたという。着目は微妙にずれているが、浜松ならばやっていけそうな予

感があった。いわば3人それぞれが、この地に埋もれている「社会資源」の匂いを嗅ぎつけたということになる。

廃材の寸法から デザインが 立ち上がる

とはいえ、最初から順風満帆だったわけではない。初めての依頼は「渥美の床」。美容室の林さんが借りているマンションの和室の、しかも「床だけ」をリノベーションする仕事だ。先述のように林さんにとって大作業はお手のものなので、キッチンやリビング、浴室は自分でリフォームし、駆け出しの建築家に1室だけ「仕事をつくってあげた」という感覚に近いのかもしれない。だが机上でしか建築を学んだことがない彼らは、自分の手で作業できることをむしろ喜んだ。林さんに工具を借りて使い方を教わり、隣室の天井を壊し、仕組みを観察。そこで出た廃材を細かく切断してモザイク状に床に

敷き詰め、サンダーで磨いた。むしろ素人仕事であるから平滑にはならない。だがその凸凹が足裏に妙に心地いい。

2番目の「三展の格子」もクライアントは林さん。美容室内に休憩スペースがほしいという依頼に対して、資材は屋上のロフトスペースを解体して出た廃材しかない。そこで彼らは廃材を採寸し、模型をつかってパズルのように組み替え、ルーバーで囲まれた2畳ほどの極小空間を設計した。つまり廃材の寸法から編み出されたデザインだ。通常とは逆の発想から出発しつつも、単にエコロジカルであるというだけでなく、造形的な飛躍を遂げている。



● 渥美マンション

築45年ほどのRC造6階建てのマンション。壁式RC造であり、柱型や梁型の出ない構造になっている。中央に設けられた階段が印象的。

既存を肯定して 都市の懐に飛び込む

このようにして、403は既存ストックのよさを生かしつつ、そこに独自のアイデアをプラスすることで活動の幅を広げてきた。彼らはデザインをすべてコントロールすることをよしとせず、老朽化

ビルを借景に、雑多な要素を受け入れ、調和させることを優先する。その背景には、古い空間に価値を見出し、センスよく使いこなすクライアントの存在があった。彼らの多くはかつて東京や海外などで働き、浜松に戻ってきた地元出身者だ。こうした人的財産もまた、街がもつ「社会資源」のひとつといえるだろう。

「私たちは日本が成長していたよき時代の『上澄み』で生きているような感じがします」と403は言う。彼らは若くして個性的なクライアントの懐に飛び込み、制約だらけの現場を踏みつつも、それを逆に楽しむことで設計の発想源としてきた。

モノがあふれ、人が減りゆく時代、これからの都市に本当に必要とされていることは何か？ この切実な問いに対し、スクラップ・アンド・ビルドを繰り返さずとも、都市にはまだ十分な社会資源が眠っていることを、彼らは浜松での設計活動を通じて、身をもって証明しているように思えた。

プロジェクトが、
浜松市中心市街地の
半径500mのうちに集中



渥美マンション



カギヤビル

R=500m

1/8,000

浜松市中心市街地

- 共同建築
- プロジェクトなどがかかわった場所

三展ビル



建て替えが難しい「共同建築」が、浜松市の中心市街地には散在。403 architecture [dajiba]がかかわったプロジェクトも中心市街地に集中している。

カギヤビル

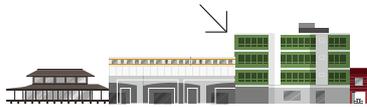


鍵屋の階段

写真上/側面から見たロフト。語学教室や事務所として使用されていた部屋に、ロフトをつくりシェアスペースとしても使用できるようにしたもの。

ロフトは階段や階段の踊り場に見立ててつくられている。階段の部分が机にもなる。構造は一部鉄骨造。下/ロフト内部。





Special Feature
Discovering Assets
Case Study

3



「カギヤビル」

建築概要

所在地 静岡県浜松市

改修設計(一部)

彌田徹+辻琢磨+橋本健史/
403architecture [dajiba]

●鍵屋の敷地

主要用途 ショップインショップ

構造 木造

施工 門西建築

階数 地上4階の1階部分

室面積 32.81㎡

設計期間 2013年7月～2014年5月

工事期間 2014年6月～7月

●鍵屋の階段

主要用途 スタジオ兼シェアスペース

構造 木造(一部鉄骨造)

施工 門西建築

階数 地上4階の4階部分

室面積 25.58㎡(一部の改修を担当)

設計期間 2014年6月～2015年2月

工事期間 2015年2月～3月

●鍵屋の基礎

主要用途 アパレルショップ

構造 コンクリートブロック造、木造

施工 李理

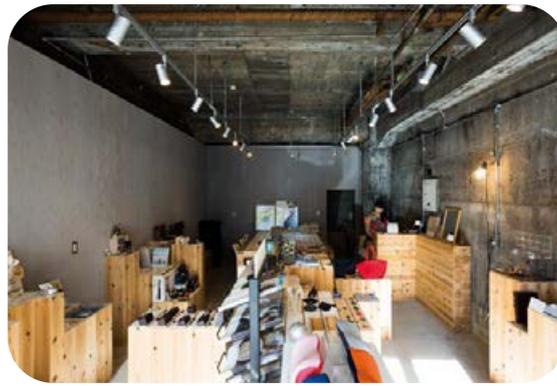
階数 地上4階の1階部分

室面積 32.66㎡

設計期間 2015年2月～7月

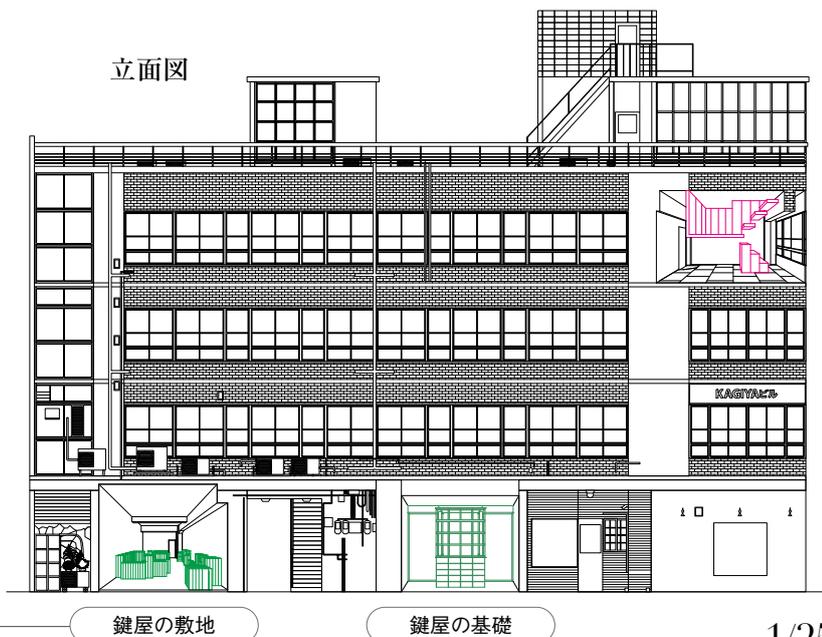
工事期間 2015年8月～9月

KAGIYA bldg.



写真右/ショップ全景。
100mm角のタイルを単位
としてショップの場所を
提供。タイルひとつで月
100円。左/レンタル中
のタイル。

鍵屋の敷地



1/250

0 1 2m



鍵屋の基礎

写真右/ショップ外観。
製作工房を中心にした
アパレルショップ。コン
クリートブロックのと
ころが工房になっている。
左/内観。

三展ビル

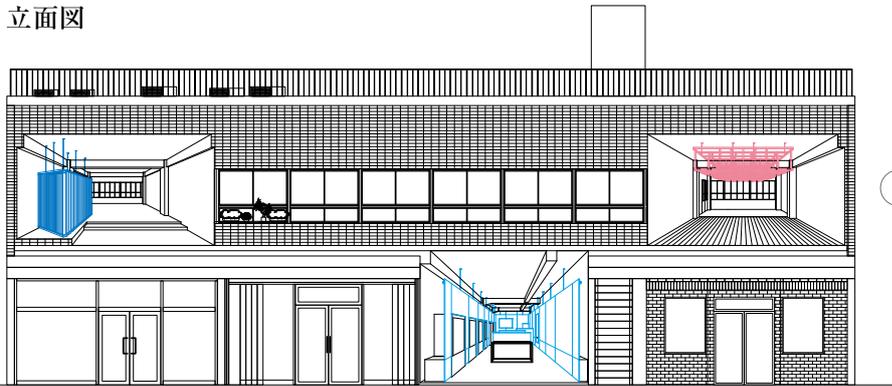
三展の天井

ビルの前後にある大きな窓からの採光をさえぎらないように、天井に設けた収納。アパレルショップの商品の陳列にも役立っている。



立面図

三展の格子



三展の天井

1/200

0 1 2m

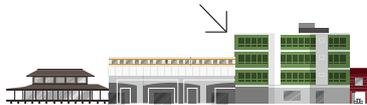
三展の什器



三展の什器

写真右/眼鏡店の内装。積層ダンボールによる内装には、商品のメガネを刺すこともでき、内装を兼ねた什器になっている。メガネやサングラスの耳にかける部分を、ダンボールに刺して陳列している。左ページ/ショップ全景。

写真2点撮影/長谷川健太



Special Feature
Discovering Assets
Case Study

3



「三展ビル」

建築概要

所在地 静岡県浜松市
改修設計(一部) 彌田徹+辻琢磨+橋本健史/
403architecture [dajiba]

●三展の格子

主要用途 美容室内部の休憩室
構造 木造
施工 彌田徹+辻琢磨+橋本健史/
403architecture [dajiba]
階数 地上2階の2階部分
室面積 54.59㎡(一部の改修を担当)
設計期間 2011年5月~6月
工事期間 2011年7月

●三展の什器

主要用途 アイウェアショップ
構造 鉄骨造(積層ダンボール仕上げ)
施工 分離発注
階数 地上2階の1階部分
室面積 46.57㎡
設計期間 2013年3月~6月
工事期間 2013年7月

●三展の天井

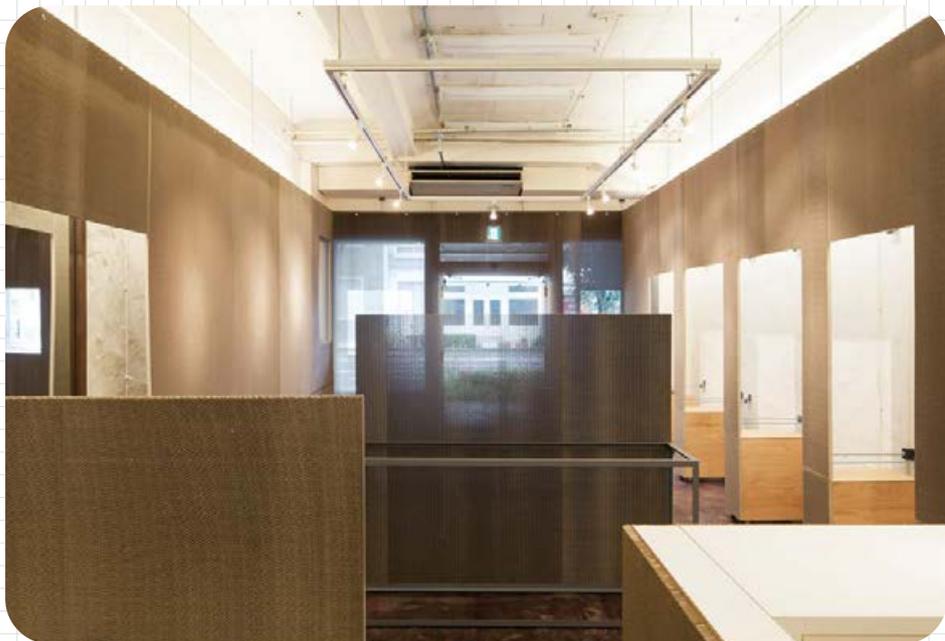
主要用途 アパレルショップ
構造 木造(一部鉄骨造)
施工 門西建築
階数 地上2階の2階部分
室面積 58.47㎡(一部の改修を担当)
設計期間 2014年6月~11月
工事期間 2014年12月~2015年1月

SANTEN bldg.



写真上/美容室の内部にあるスタッフの休憩室。ビル内倉庫のロフトの床材を解体して転用したもの。下/美容室全景。左手に休憩室。

三展の格子



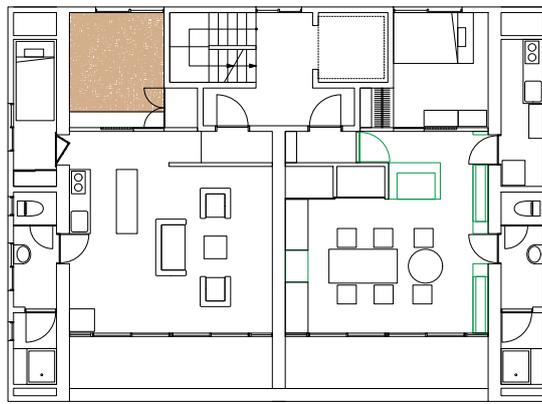
渥美マンション

渥美の収納

手編み教室のための収納。
既存のアイロン台や黒い
棚を、新しい収納と組み
合わせている。既存と新
設の棚の寸法を合わせて
つくっている。



渥美の床



渥美の収納

6F



4F

1/200 平面図

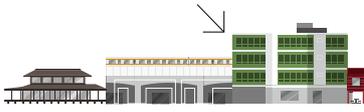
0 1 2m

渥美の個室

渥美の個室

403architecture [dajiba]
の事務所兼住居。柱型や
梁型がなく天井や壁が平
滑になっている。机や収
納などは自ら施工。





Special
Feature
Discovering
Assets
Case Study

3

辻 琢磨

つじ・たくま／1986年静岡県浜松市生まれ。2008年横浜国立大学建設学科卒業。10年横浜国立大学大学院建築都市スクールY-GSA修了。10年Urban Nouveau*勤務。11年メディアプロジェクト・アンテナ企画運営。11年403architecture [dajiba] 設立。



Hashimoto Takeshi

Tsuji Takuma

Yada Toru

橋本健史

はしもと・たけし／1984年兵庫県生まれ。2005年明石工業高等専門学校建築学科卒業。08年横浜国立大学建設学科卒業。10年横浜国立大学大学院建築都市スクールY-GSA修了。11年403architecture [dajiba] 設立。

「渥美マンション」

建築概要	
所在地	静岡県浜松市
改修設計	彌田徹+辻琢磨+橋本健史/ 403architecture [dajiba]

●渥美の床	
主要用途	寝室
構造	木造
施工	彌田徹+辻琢磨+橋本健史/ 403architecture [dajiba]
階数	地上6階の6階部分
室面積	64.20㎡(一部の改修を担当)
設計・工事期間	2011年4月

●渥美の個室	
主要用途	事務所兼住居
構造	木造
施工	彌田徹+辻琢磨+橋本健史/ 403architecture [dajiba]
階数	地上6階の4階部分
室面積	64.20㎡
設計期間	2012年3月～6月
工事期間	2012年7月～8月

●渥美の収納	
主要用途	手編み教室兼住居
構造	木造
施工	和功建築
階数	地上6階の6階部分
室面積	64.20㎡
設計期間	2012年9月～10月
工事期間	2012年10月～12月

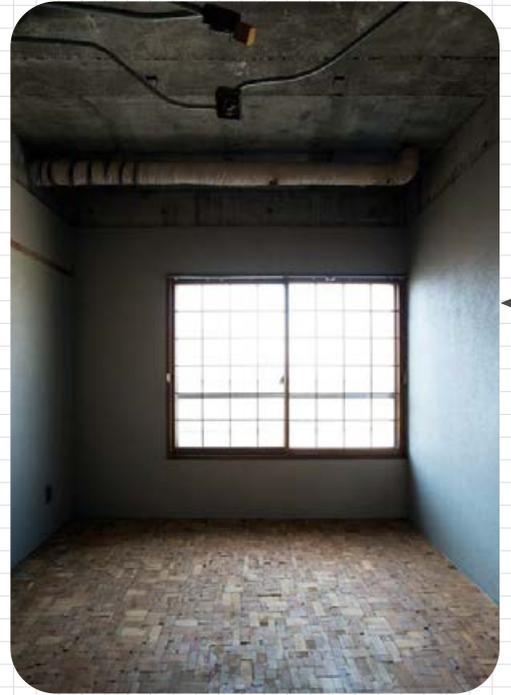
彌田 徹

やだ・とおる／1985年大分県生まれ。2008年横浜国立大学建設学科卒業。11年筑波大学大学院芸術専攻修了。11年403architecture [dajiba] 設立。

403architecture
[dajiba]

おもな作品 = 「頭陀寺の壁」(11)、「海老塚の段差」(11)、「富塚の天井」(12)。

ATSUMI mansion



渥美の床

写真上／部屋の全景。隣室の天井を解体し、その野縁の材料を床に転用したもの。野縁は、均等な厚みに切断して、床に敷き、最後に、サンダーに

よってならし、肌触りよく滑らかな床にしている。下／細分化して床に敷き詰められた、元野縁の材料。



モクチン企画

企画・設計

連 勇太郎

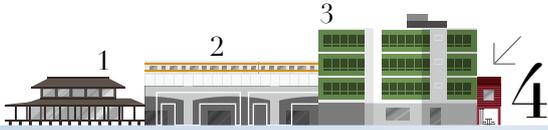
作品

k u b o m i



既存覚醒のレシピ

今日本には、空室がつづくアパートや空き家がたくさんある。
人口減少が進むとさらにそれらは増えていくだろう。
条件に恵まれて再生されることもあるが、
連勇太朗さんが主宰するモクチン企画で行っているのは、
それら全体の再生のために「レシピ」をつくること。
その「レシピ」は何を生み、どこに向かうのか。



Special
Feature
Discovering
Assets

Case Study

4

大森駅の近くにある木造長屋の改修。隣のカドヤ建設が購入し、自社のミーティングスペースとともに、社会に開いた屋外スペースをつくった。



写真右/「kubomi」の内部より外側を見る。1階のくぼみ部分より。左/2階のミーティングスペースより。

モクチンに活路はないのか

木賃アパート、通称モクチン。戦後の住宅不足に発した民間の木造賃貸住宅で、たいていは2階建て。とりわけ数が多い東京では45万6000戸あるという。23区内では山手線の外側にドーナツ状に広がる、いわゆる木造住宅密集地域（モクミツ）と重なって分布している。災害発生時の安全性が強く危惧されている地域だ。モクチンの多くは老朽化、環境悪化、市場の変化による空き家率の上昇という必然の問題を抱えているが、家主の高齢化からくる管理不足、改修資金の不足、敷地の接道長さの不足など、さまざまな不足により建て替えがままならない状況にある。家賃の引き下げしか空室率低下を防ぐ手段はない、というのが不動産業界の定説。敗戦覚悟の守り一辺倒か。

このなかからたまたま改修資金が多少ある1棟のモクチンを取り上げ、丁寧な改修設計を施し、綿密な施工を行って再生させることは理論的にはできる。だが現実にはどうか。設計者にとっては労多くして実入りは少ない。施工者にとっても面倒が多いうえに総工費は少ないのだから触手が伸びない。家主にしても効果に確信をもてないので二の足を踏む。そうして再生されないまま放置され、さらには家賃が下がるという悪循環に陥る。

建築系の大学院生だった連勇太郎さんは渋谷区にあるモクチンの改修を手がけたが、完成したときに達成感よりもむしろ空しさがあったという。周囲に古びたモクチン群が立ち並ぶ環境には何の変化



2階のミーティングスペースより、くぼみ部分および歩道を見下ろす。人の行き来を感じるスペースになっている。



1階のくぼみ部分より、2階のミーティングスペースを見上げる。既存の屋根や火打ち梁が白い空間のなかで映えている。

Before



写真提供／モクチン企画

正面に銅板を張った、いわゆる看板建築。左側に同じ造りの建物が並び立っている。

前面の歩道に対して開かれたスペース。壁面は白く塗られ、湾曲している。休憩や、イベントのためのレンタルのスペースになる。



Special Feature
Discovering Assets
Case Study

4

レシピで モクチン群を活性化

も起きないことを実感したからだ。この経験をきっかけに、まったく新しいアプローチに乗り出すことにした。

「モクチンレシピ」

連さんが主宰するNPO法人モクチン企画が運営するウェブサイトの名称である。モクチンを改修する際のデザイン・アイデア集で、現在は58種ある。

たとえば「No.2きつかけ長押」は、どこにもある長押を利用してハンガーかけやもの置きとする提案。「No.52メリハリ真壁大壁」は部屋のタイプにより木造軸組を生かした仕上げと壁材で軸組を覆った仕上げを併用する提案。「No.57減築デッキ」は、増築された差し掛けの部屋を屋外デッキに変更して風通しや明るさを確保する提案。

このように58種の中身は、ほんの小さな付け足しや一部分だけの取り換えがほとんどである。きわめて現実的、即物的、大掛かりなものはない。

レシピは2012年からウェブ公開されている。数度にわたって改善されてきたインターフェースはとても軽快で洗練されている。ひとつのレシピに「相性の良いレシピ」「似ているレシピ」が関連付けられ、さらに工費、DIYの難易度が表示されている。実際の事例から検索することもできる。

閲覧・利用の対象者は家主、住み手、不動産業者、施工者など幅広い層が想定されている。利用者はニーズに応じて、

レシピのひとつだけをインテリアの模様替えのヒントにしてもよいし、外観の見えを少しだけよくしたり、あるいは主菜+副菜+デザートのような感覚でいくつかを組み合わせ、住み心地の改善に乗り出してもよい。レシピはきっかけを示し、方向性を与えているだけだから、その使い方はまったく自由なのである。

しかし「モクチンレシピ」の真の企画はこの先にある。年会費20万円で会員になると、各レシピの使い方とつくり方の詳細の閲覧、各種情報の受け取り、再生事例の内覧会への参加、勉強会やセミナーへの参加、相談コーナーの利用などの特典がある。会員には地域に根付いた活動を地道につづけている不動産業者が想定されていて、現在は20社。

この会員制度によってレシピはたんなるデザイン・アイデア集であることを一挙に突き抜ける。住み手、家主、仲介者（不動産業者）、施工者を緊密に、多様に、効果的に結びつけるプラットフォームになるからだ。仲介者はレシピを用いて家主への提案の選択肢を増やし、施工者は具体的なつくり方を知って改修を効果的に行い、住み手と家主はそれらの複合効果の恩恵に浴する。その結果、住み手を得たモクチン群が活性化し、一帯の住環境がじわじわよくなっていく、というストーリーが成り立つ。

モクチンレシピの 会員の実践

JR大森駅の西口、駅前を南北に走る池上通りを南に300mほど行くと右手

にカドヤ建設の建物が現れる。そのすぐ隣に築60年、木造2階建て、間口2間の店舗がふたつ並ぶ長屋がある。その片方をモクチンレシピの会員であるカドヤ建設が所有し、連さんとの協働で改修を行ったのが「kubomi」である。

道路に面して幅3・6m、奥行き3・3mの空間がある。道路との境には透明なビニールカーテンが吊られているが、普段は開けられている。中に入ると床はモルタル、白い壁は奥側が半円をなしている。

仕掛けは3つ。ひとつは1階の壁をマグネツト塗料、ホワイトボールド塗料で塗装したことで、磁石でものを留め、ペンで文字や絵を描くことができる。ふたつめは、2階の床を撤去して吹抜けとし、天井や斜交いなどの木造軸組みを現しにして味わいを出したこと。

3つめは、2階の外装の銅板をクリーム色から鮮やかなベンガラ色に塗り直し、従来の開口部の形状はそのままに大きな一枚ガラスとして、街並みに新鮮な印象を刻したこと。

街並みのなかの 小さな人だまり

広さ約5・5畳の「kubomi」に特定の用途はない。現在は椅子とベンチが置かれているだけ。道に開かれた常時



写真提供/カドヤ建設

くほみ部分を舞台に見立て、ライブパフォーマンスの場を提供。ストリートミュージシャンにもスペースがある。

開放の半屋外スペース。モクチンレシピの遠い祖先であるC・アレグザンダーのボタンランゲージのなかではNo.124「小さな人だまり」が最も近い。それはこう叙述されている。「公衆の集まる場所は、小さな人だまり——外縁部の部分的に囲われた小さな場所——で取り囲むこと。そこは人の経路から外れた場所であり、人々が立ち止まり、その活動に自然にかかり合えるような場所である」

「kubomi」はウィロード山王商店街の入口にある。商店街の入りは年々減少しているという。コンビニなどの店舗がところを選ばずにでき、既存の商店街の商圏が狭まっているのがおもな要因だといえる。この商店街にはカドヤ建設と同グループのスーパードヤがあり、その隣には3・11後、商店会をあげての石巻支援を契機に生まれたアキナイ山王亭がある。さまざまな団体がここで催し

を行い、毎週土曜日には石巻産の商品を販売する石巻マルシェが開かれている。「kubomi」はこうした地域の活発な動きとの連動が意図されている。若手クリエイターの個展、ハロウィン時の子どもの落書きイベント、石巻マルシェをもち立てるコンサート会場のひとつなどの催しが不定期にある。それも一時で、ふと見ると、お年寄りが腰を下ろしている、子どもたちがたむろしている、主婦たちが世間話をしている、弁当を食べているなど、いろいろな場面が見られると

いう。所有者は今の時点で許諾の線引きはしないという。何もない空っぽのパブリックな場所が常時、街並みのなかにあることの意味が、ここで試され、問いかけてられている。

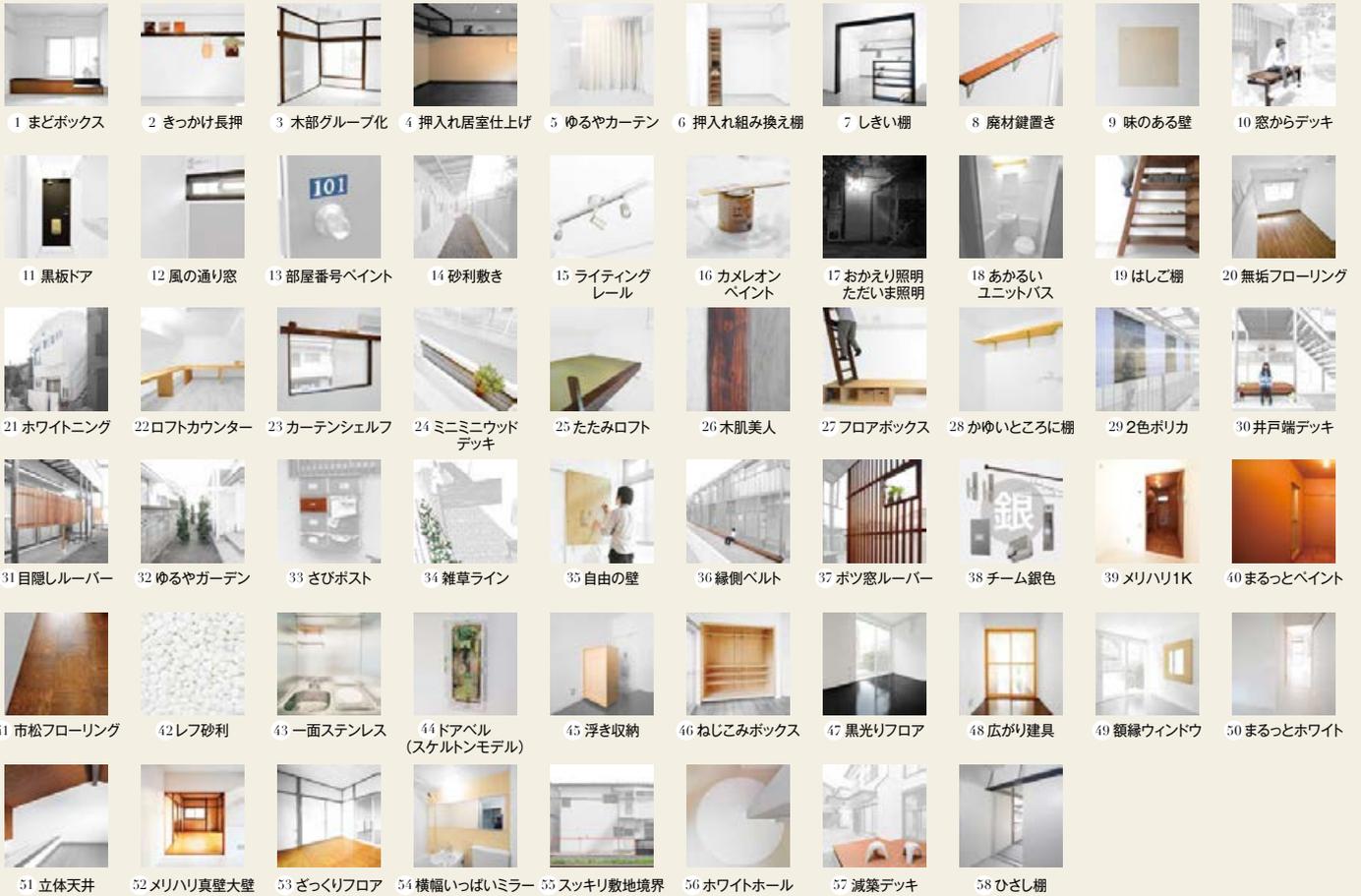
建築家の 第4のアプローチ

住環境の改善への建築設計者の関与を考えたとき、高みから大上段のスキームを企てる方式はとうに限界が明らかになり、個人住宅の一つひとつに創造能力のすべてを注ぎ込むアプローチも発展性が期待できず、地域に身を投げ入れてコミユニケーションを繰り返しながら改善の道を探る方法もいささか出口が遠いのは否めない。それが現状ではないか。

モクチンレシピはそれらとは明白に異なる第4のアプローチを示している。ウエブを利用して利害を異にする層を垂直に結びつけ、理念や提案の枠を超えて現実的な改良にストレートに向かい、成果が重なるに従って実地の検証を経たシステムがさらに強度と有用性を増していく。連さんはしかし、モクチンレシピというシステムの対象は木質アパートに限定されないと考えているようだ。私的領域から公的領域へ、あるいはほかのビルディング・タイプ、ほかのスケール、さらには建築とは異なるジャンルへの発展がもくろまれていたのかもしれない。その点からすると「kubomi」の小さな試みの先には、広く深い海原が見通されているのだろう。



モクチンレシピ



No. 2 きっかけ長押

壁面を有効利用するきっかけをつくり、部屋全体をピシッと引き締める。材の色や幅によって部屋の雰囲気を変えることができる。



No. 52 メリハリ真壁大壁

真壁と大壁の部屋を対比的に仕上げるレシピ。大壁の部屋は機能が充実し使い勝手がよく、真壁は住み手が自由に使える空間になっている。



No. 57 減築デッキ

光や風をさえぎる平屋部分をデッキに変え、明るく風通しのよい環境をつくるレシピ。隣接する建物と距離ができるので防災上の機能もあがる。

ウェブサイトで得られる、レシピの情報

考え方

使い方

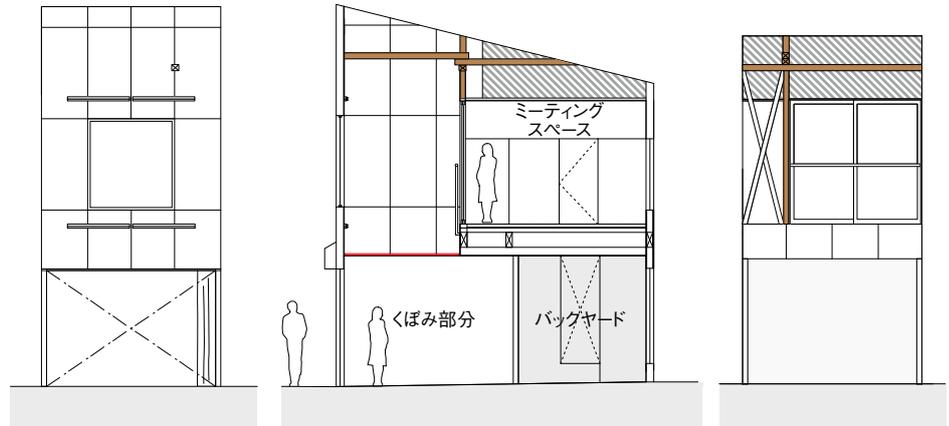
つくり方





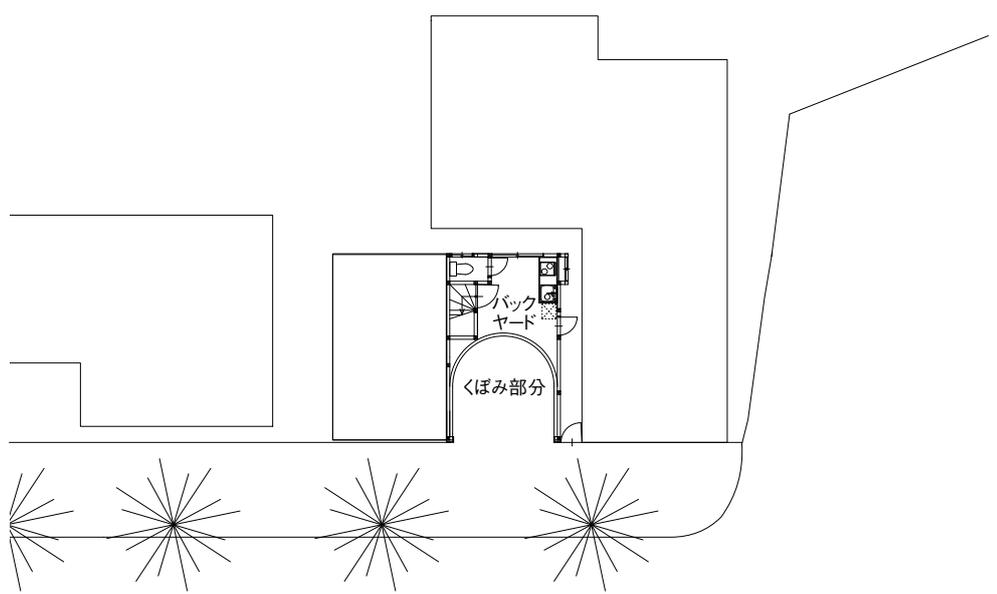
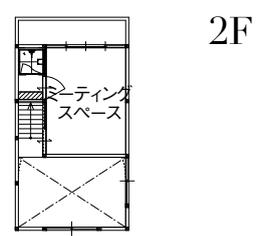
断面図

0 1 2m
1/150



平面図

0 1 2m
1/250





正面外観。外装は赤く塗り直された。

「kubomi」

建築概要

所在地	東京都大田区
主要用途	ギャラリー
建主	カドヤ建設
企画・設計	モクチン企画
構造	木造在来工法
施工	カドヤ建設
階数	地上2階
敷地面積	31.31㎡
建築面積	23.00㎡
延床面積	44.00㎡
設計期間	2015年2月～3月
工事期間	2015年3月

おもな外部仕上げ

外壁	塗装
開口部	ビニールカーテン

おもな内部仕上げ

床	モルタル金ごて仕上げ
湾曲壁	マグネットペイント、 ホワイトボードペイント
壁	構造用合板 拭き取り塗装
天井	既存野地板現し

連 勇太郎

Muraji Yutaro

むらじ・ゆうたろう／1987年神奈川県生まれ。2012年慶應義塾大学大学院修士課程修了後、NPO法人モクチン企画設立、代表理事に就任。15年同大学院博士後期課程単位取得退学。現在、慶應義塾大学SFC特任助教、横浜国立大学大学院客員助教。おもな作品＝「北沢プロジェクト」(09)、「フロムファーストⅡ」(12)、「神明町の戸建て」(14)。



2階ミーティングルーム。右手の吹抜けでくぼみ部分とつながっている。青い建物は隣のカドヤ建設。



正面の夜景。夜には室内の光が、外にふんだんにもれる。ビニールのカーテンを閉めた室内利用もできる。



くぼみ部分のバックヤード。右手の階段を上ると2階のミーティングスペースにつながる。



明るいベージュとグレーがあふれる優雅な世界

ミュンヘンはきれいな街だとドイツ人の評価も高い。いつでも観光客であふれているが、それは街の清潔さや緑の量、人々の気質、ビールや朝に食するというヴァイス・ブルスト（白ソーセージ）のおいしさなども影響しているのかもしれない。アスパラガスは採ってもよい最後の日（*1）に近かったが、とても太い。

そのミュンヘンでエレガントなホテルに出会った。すっきりしたモダンデザインなのが気になるものがなく、なんともいえない気品があつて使いやすい。この「なんとなく……」というのがデザインで一番難しい。「気負い」がないのだ。客室は136室、スイートは24室。すてきなスパがある。

ホテルのカラースキームでベージュをおもなものにすると、ほとんど反対されない。日本では江戸時代に奢侈禁止令があつたため庶民は金色や銀色の代わりにたくさんの茶色とねずみ色をつくり出し、そのせいだともいわれる。しかし、ほとんどすべてのモノは茶色に酸化して朽ちていく過程にあるから、ベージュは共感されて受け入れられやすいのだという説のほうが正しいように思う。

このホテルはパブリックもゲストルームも明るいベージュ系、グレー系がじつに多様に使いこなされている。あらゆる内装、ドアなどに使われたベージュ、グレー、オフホワイト。金属の金色や木は限られ、ドレープカーテンやクッションなどにキャラクターのある色が効果的に使われている。ソフイステイケットされて抑えられたカラースキームはホテル全体のコンセプトにたくみに貢献していて、うまい。ロココ・フォルテ・コレクションの経営者でもあるオルガ・ポリッツィイ（*2）のデザイン。

ホテルガイドやチェーンのパンフレット、レターペーパーや封筒などのステーションナリーのグラフィックも、大きさ、形、色、フロント、レイアウトなど、エディトリアル・デザインが行き届



バルコニーから裁判所などが見える。

いていて気持ちがいい。アメニティはニューヨーク製。家具デザインもばらばらなようだが調和している。チェストの引き出しは閉まり方がスロー。配慮を感じる。

白く清潔感のあるバスルーム。洗面カウンターだけ茶色の大理石。コップは落としても割れないように金属。バスタブは濡れそうなほど大きく、吐水口はオーバーフローと一体化していた。

レセプション・ロビーもオフホワイト。天井高さは6・2mも。隣接する公園を借景としたダイニングルームで朝食をいただく。木漏れ日がかきれい。1泊だけの滞在を恨めしく思ったことだ。

3つのピナコテーク（*3）にも遠くない。その日は15〜18世紀の絵画を集めたアルテ・ピナコテーク（旧絵画館）の棟でたくさん名作にあらためて感嘆したり、ピナコテーク・デア・モデルネの白い建築を見たり。

街でバイエルン州の男が身につける革の半ズボンをおもしろがって買ってしまった。ピアホルの従業員のようだがなかなかいい。これで銀座は歩けないが……。

*1/アスパラガス採取・ヨーロッパでは、株生育などの観点から、採取期限を夏至の6月21日前後と決めている国が多い。

*2/Olga Polizzi: 1940年代後半ロンドン生まれの女性ホテル経営者。ロココ・フォルテ・グループの副会長、デザイン・ディレクターとしていくつものホテルを手がけている。

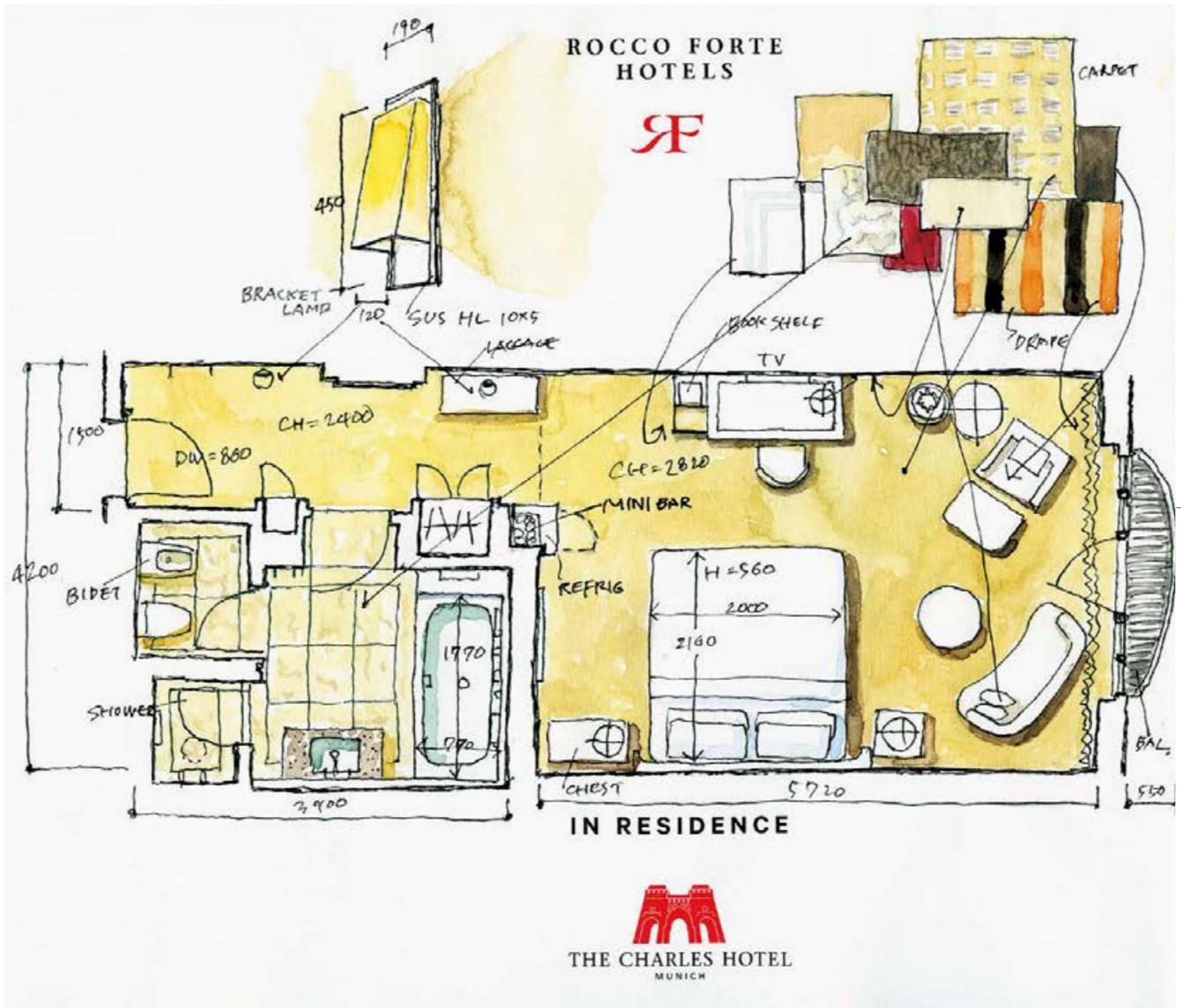
*3/ピナコテーク・美術館・絵画館。ミュンヘンでは、バイエルン王室のコレクションを基にして18世紀までの絵画を取めたアルテ・ピナコテーク、近世の絵画などを取めたノイエ・ピナコテーク、現代美術、グラフィックアート、建築、デザインを広く展示しているピナコテーク・デア・モデルネ（2002年シュテファン・ブラウンフェルス〔Stephan Braunfels〕の設計）の3棟が近接する。



スリッパ、グレーと白で、男女2種。

うら・かずや/建築家・インテリアデザイナー。1947年北海道生まれ。70年東京藝術大学美術学部工芸科卒業。72年同大学大学院修士課程修了。同年日建設計入社。99〜2012年日建スペースデザイン代表取締役。現在、浦一也デザイン研究室主宰。北海道日建設計デザインアドバイザー。著書に『旅はゲストルーム』（東京書籍・光文社）、『測って描く旅』（彰国社）、『旅はゲストルームII』（光文社）がある。

Text & Sketch by Ura Kazuya



バスタブの吐水口はオーバーフローと一体化。

Rocco Forte The Charles Hotel

Add/Sophienstrasse 28, 80333

Munich, Germany

Phone/+49 89 544 5550

URL/www.roccofortehotels.com/

de/hotels-and-resorts/the-charles-hotel/

丸 鉄

IRONHOUSE

IRONHOUSE 設計／椎名英三+梅沢良三

Shina Eizo & Umezawa Ryoza × Fujimori Terunobu

1 天井を見上げると、SF映画の背景のような独特の空間が広がる。色は鉄ならではの錆色。



現代
住宅 第三十五回
併走

文／藤森照信

Text by Fujimori Terunobu
Photographs by Fugo Hitoshi

連載

写真／普後 均



閑静な住宅街の一面に置かれた鉄のカタマリ。角の緑の下に入口がある。

2

20

世紀建築にとって鉄をどう表現するかは大きなテーマだった。その足跡をたどると、まず19世紀の鑄鉄による歴史主義的な表現に始まり、最後は鋼鉄（ステール）の枠組構造（ラーメン構造）にガラスをはめるところに至り着く。戦後のこの到達を可能にしたのは、もちろんシカゴに移ってからのミースで、ミースに示唆を与えたのは戦前の坂倉準三の「パリ万博日本館」（1937）だった。

線材としての鉄ならそのとおりだが、鉄は鉄板として面でも使われ、鉄板構造についても建築家は忘れてはいけない。

鉄板構造の代表は船と水槽だが、もう少し建築っぽい分野にも例はあり、エッフェルがニューカレドニアに建てたアメデ灯台と、明治の犬吠埼灯台の霧笛室を見ているが、いずれもそうとう古く、戦後の例は知らない。

鉄板構造の建築を大きく欠くそうした20世紀建築に変化が現れたのはごく近年のことで、石山修武と伊東豊雄が先駆した。面構造では建築より決定的に先を行く造船技術を世界で初めて建築に持ち込み、自由度の高い鉄の構造表現を可能にした。いずれも文化施設や商業ビルなどで、建築史家としてはいつ誰が何の理由でその技術を住宅に移すかに関心があった。まず、阿部仁史が石巻の小住宅で試み、さらに2007年その名も

「IRONHOUSE」が出現した。

施主は梅沢良三、設計は椎名英三と梅沢良三。当然のように鉄板構造は構造設計家として名高い施主が手がける。

建築家の椎名は、施主と構造設計家によって板挟み状態。

梅沢「構造はできても空間は無理だから椎名さんをお願いした」
椎名「気持ちいい空間を考える



地下1階の鉄板ならではの階段。

3

4

リビングと中庭を区切る引き込みガラス戸の溝に注目。





現代住宅の 併走

Shina Eizo & Umezawa Ryoza × Fujimori Terunobu

地下1階の主室と
中庭。椎名英三の
腕がさえる。

5

「のが、このたびの私の仕事」ということらしい。

椎名さんらしいと私が感じたのは吹抜けの天井が斜めに上がっていき、頂部から光が落ちる空間で、住宅にはごくまれなこの構成は椎名さんの師の宮脇檀の「松川ボックス」(71) ゆずり。松川ボックスでは斜めの上がりが平面だったが、ここでは階段状に段々になって上がる。段々だから松川ボックスに比べ表情は著しく強くなり、室内空間の最大の見せ所となっている。室内に入る前から心配したのは、断熱の一件。打放し同様、鉄板構造の壁体はそのままとあまりの暑さ寒さに猫も逃げる。石山の「リアス・アーク美術館」(94) 以来、日本の鉄板構造施工をリードする元造船所の高橋工業は、4・5mmの鉄板2枚のあいだにデッキプレートを挟み、その空隙に漁船用のウレタンを充填して全厚10・9mmの壁体をつくっている。溶接のとき、ウレタンへの加熱が心配だが、

6

すべて鉄の窓の工夫も見どころ。



有害性ガスを出して燃えたりせず少し焦げるだけらしい。工場ですうしてつくった壁パネルを現場に運び、逃げを2mmとって立て並べ、最後に溶接して一体化する。

外

観からは広からぬ敷地いっばいに鉄の筒がズドンと立つように見えるが、中に入ると印象は一変し、緑がこれでもかとあふれている。緑の見どころのひとつは地下1階で、外部空間(中庭)と室内空間がガラスの引き戸を引き込むと完全に一体化する。椎名さんのディテールの勝利。

もうひとつの緑の見どころは屋上。室内から見上げた段々も屋上

7

地下1階の中庭を屋上から見下ろす。



緑化の土を留めるためだった。建築緑化の試みとしては、量はともかく質は屈指。建築緑化についてはうるさいほうだが、野菜と果樹を含めこれだけ多様な緑を、ちゃんとコントロールしている例はほかに知らない。

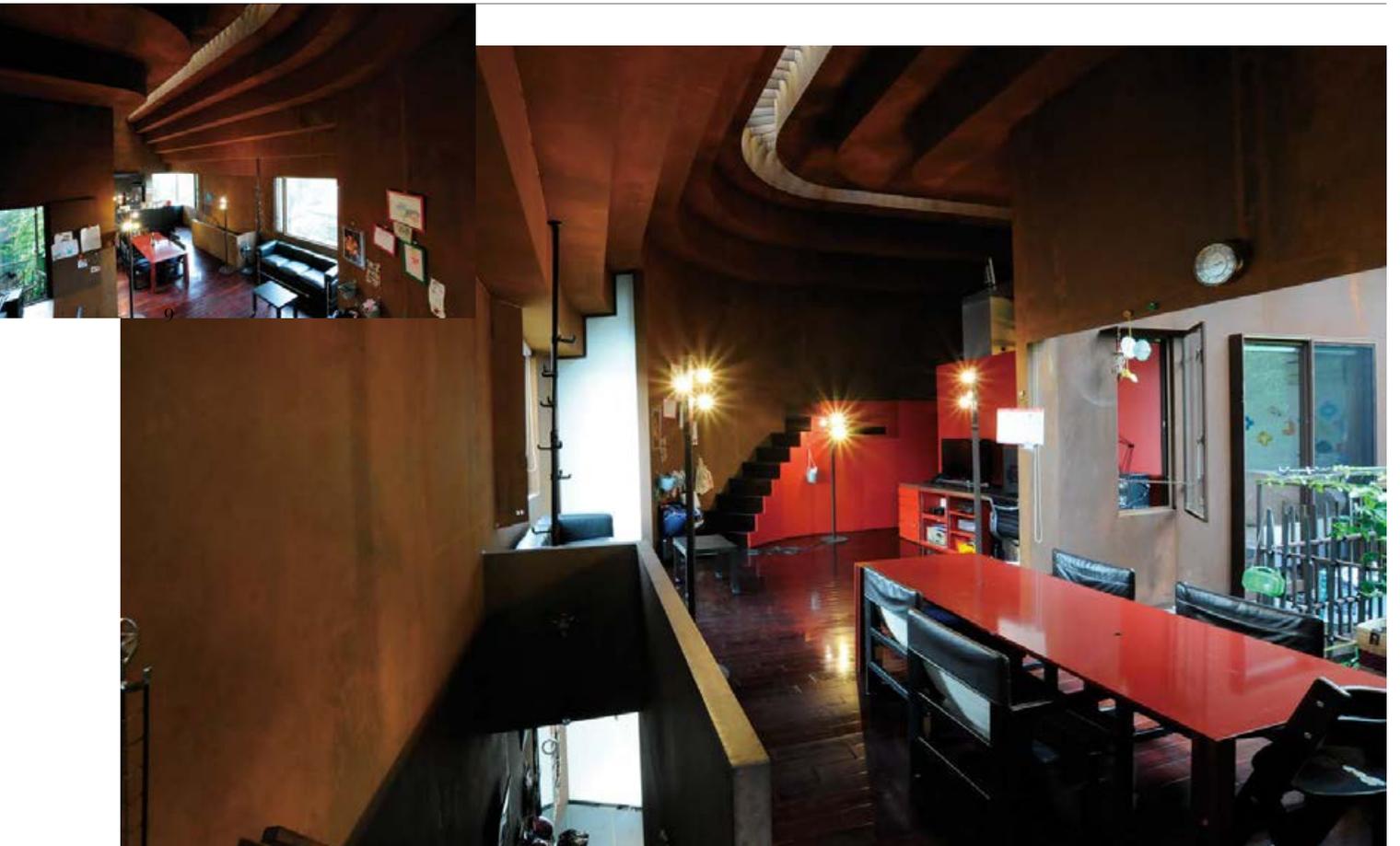
1 ルテン鋼の鉄板構造は鉄錆を宿命とするが、鉄錆のマイナスを質の高い緑がどれだけ補っていることか。

梅沢さんは緑が好きだから緑化を実現し維持しているわけだが、もしかしたら、鉄が梅沢さんを通して緑を求めたのかもしれない。そんなことを考えたのは、屋上の細道をたどりながら「池辺陽自邸」(58)と石山の「世田谷村」(2001)を思い出したからだ。前者は、鉄骨とガラスだけの無機質さを特徴とするが、しかし池辺は隙間から侵入した緑を生い茂るがままに任せていたし、石山は高橋工業がつくった鉄だらけの自宅の屋上に大量の土を入れて庭園(畑)としていた。

鉄は緑を求め、鉄筋コンクリートは緑を求めない、のか。
 なお、なぜ住宅に鉄板構造を用いたかについて梅沢さんに聞くと、「2000年はもたせたいから」。

2階リビングをロフトから見下ろす。

8



9
 奥の階段を上るとロフト。右手が中庭、右奥に寝室がある。

10
 屋上からトップライトを見る。SF映画の背景のような天井の上がこんなに緑豊かになっているとは。

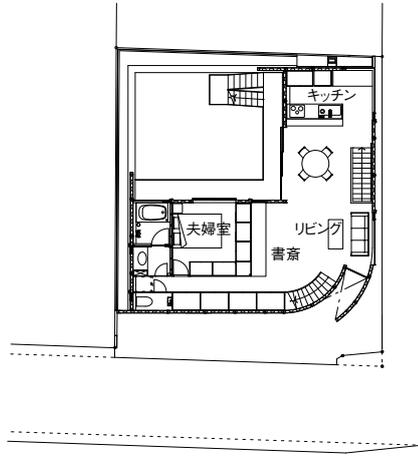
11
 これほど単位面積あたりの充実度の高い屋上庭園はほかにない。



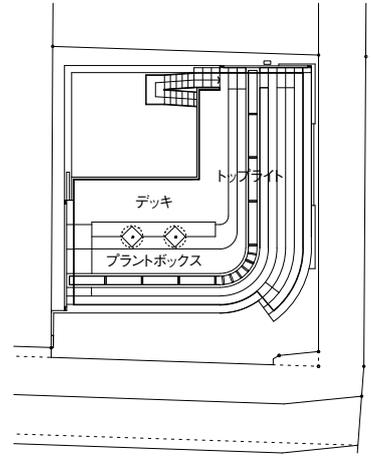
平面図

0 2 4m

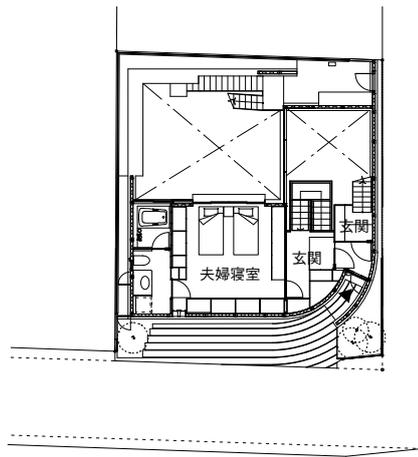
1/300



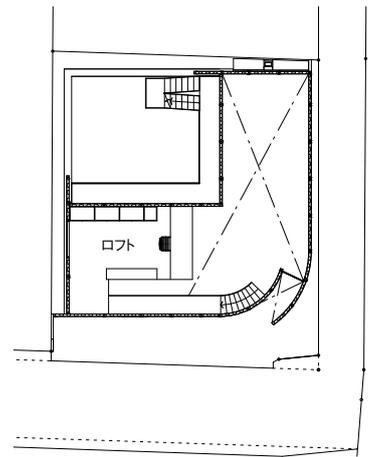
2階



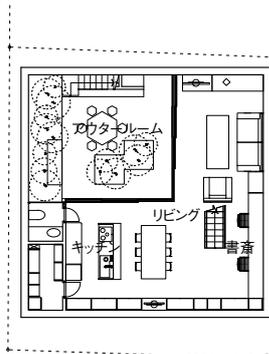
屋上



1階



ロフト



地下1階

アイアンハウス
IRONHOUSE

建築概要

所在地	東京都世田谷区
主要用途	専用住宅
設計	椎名英三+梅沢良三
構造設計	梅沢良三
施工	滝澤建設+高橋工業
敷地面積	135.68㎡
建築面積	66.77㎡
延床面積	172.54㎡
階数	地下1階、地上2階
構造	鉄骨造+鉄筋コンクリート造
竣工	2007年
図面提供	椎名英三建築設計事務所

梅沢良三

1944年生まれ。日本大学卒業後、木村俊彦のもとで構造設計家となり、その後、丹下健三の事務所を経て、84年、独立。

2003年、自邸兼アトリエ「IRON-NY SPACE」を鉄板構造でつくる。「IRONHOUSE」で椎名英三とともに日本建築学会賞受賞。日本を代表する構造設計家として知られる。



Umezawa Ryozo

椎名英三

1945年生まれ。日本大学卒業後、大高正人の事務所を経て、宮脇檀のもとで住宅設計を学ぶ。76年、独立。宮脇檀の流れを継ぐ建築家として知られるが、今回の「IRONHOUSE」を見て、本人には意外かもしれないが、大高正人の骨太い表現も引いていると思った。梅沢のついた木村も、椎名の大高も、ともに前川國男の弟子にちががなく、前川の遠い響きを聴く思いがする。



Shina Eizo

藤森照信

建築史家。建築家。東京大学名誉教授。東京都江戸東京博物館館長。専門は日本近現代建築史、自然建築デザイン。おもな受賞=『明治の東京計画』(岩波書店)で毎日出版文化賞、『建築探偵の冒険 東京篇』(筑摩書房)で日本デザイン文化賞・サントリー学芸賞、建築作品「赤瀬川原平邸(ニラハウス)」(1997)で日本芸術大賞、「熊本県立農業大学校学生寮」(2000)で日本建築学会作品賞など。



Fujimori Terunobu

東京ガーデンテラス紀尾井町

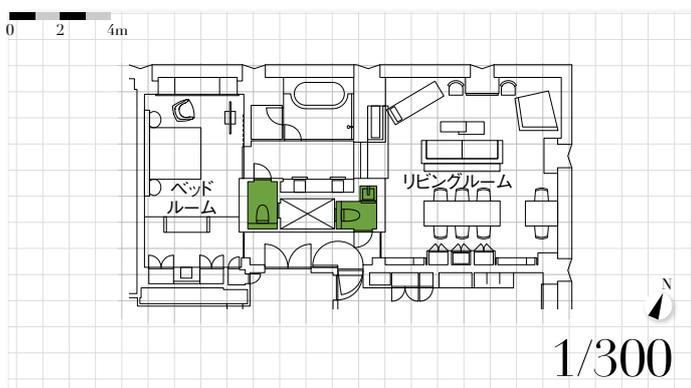
Tokyo Garden Terrace Kioicho



トイレ



ベッドルーム

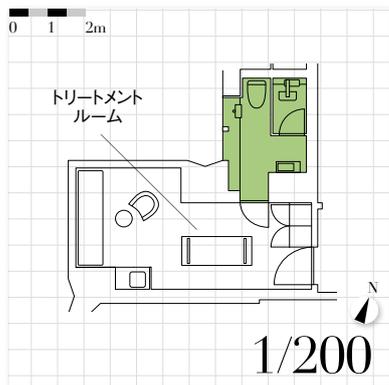


写真右/ベッドルーム。窓際にはダイベッドが置かれる。右にバスルーム。中/トイレ内装には、大理石「アジャックス」を使用。左/インテリアデザインは、ロックウェルグループ・ヨーロッパによる。

建物外観



Sky Gallery Lounge Levita



36階のレセプションに隣接する「Sky Gallery Lounge Levita」。高さ9mの壁面には、波打つガラスのアートを設置。アーティストの野口真里さんのデザイン。大開口部より、都心を見渡すことができる。

新旧の風景を楽しめる複合施設 「赤プリ」跡地の 新たなランドマーク

「赤プリ」の愛称で親しまれた、ランドプリンスホテル赤坂の跡地に「東京ガーデンテラス紀尾井町」が7月27日、全面開業した。敷地内には、オフィス・ホテル・商業施設・カンファレンスからなる「紀尾井タワー」、旧ランドプリンスホテル赤坂の旧館として使われていた旧李家東京邸を保存・復原した「赤坂プリンスクラシックハウス」、賃貸集合住宅「紀尾井レジデンス」の3棟が立つ。事業主は西武プロパティーズ、全体の設計は日建設計。

「紀尾井タワー」を中心に、最先端ビルの水まわりを取材した。30000㎡を超える広大な敷地はかつて大名屋敷があった由緒ある土地で、赤坂見附交差点に通じる紀尾井町通り、赤坂御門跡や「赤坂プリンスクラシックハウス」のあるプリンス通り、弁慶濠、清水谷公園に囲まれ、緑豊かで起伏に富んでいる。

「赤プリ」といえば、旧館だけで

取材・文/大山直美 写真/傍島利浩(ポートレットを除く)



リビングルーム

スイス・パーフェクション スパ キオイ



洗面コーナー



トイレ



トリートメントルーム

写真右／トリートメントルームの窓際にはデイベッド。中／トイレ。眼下には、都会の景色が広がる。窓枠に取り付けたペーパーホルダーは特注品。左／洗面コーナー。フローティングタイプの洗面器を採用。

インテリアデザイン会社は、ホテル日本初進出のロックウエルグループ・ヨーロッパを選定。彼らが打ち出したデザインコンセプト「Levitation(浮揚感)」や「Framed kaleidoscopic view(額縁で切り取られた万華鏡のような景色)」を象徴するのが、開口部に面したデ

地上36階建ての「紀尾井タワー」の30〜36階を占める「ザ・プリンスギャラリー 東京紀尾井町」は、宴会場を併設せず、客室数も250室に絞ったホテル。「外資系ホテルと競合できるような宿泊特化型のホテルを目指しました」と語るのは、西武プロパティーズの篠塚正博さん。

客室も水まわりも都会の景色を存分に

なく、雁行した外観が特徴的な丹下健三設計の新館の印象も強かったが、新しいオフィス・ホテル棟と住宅棟のふたつのタワーの外装デザインを手がけたのは、コンペで選ばれたアメリカのコーン・ペダーセン・フォックス・アソシエイツ(KPF)。西武プロパティーズの猪鼻茂樹さんは「敷地のまわりが開けているので、ランドマーク性を重視しました。KPFの提案は重箱を積み上げたようなデザインが和を感じさせ、角ばった形は丹下さんのデザインにも通じると評価が高かったですね」と振り返る。



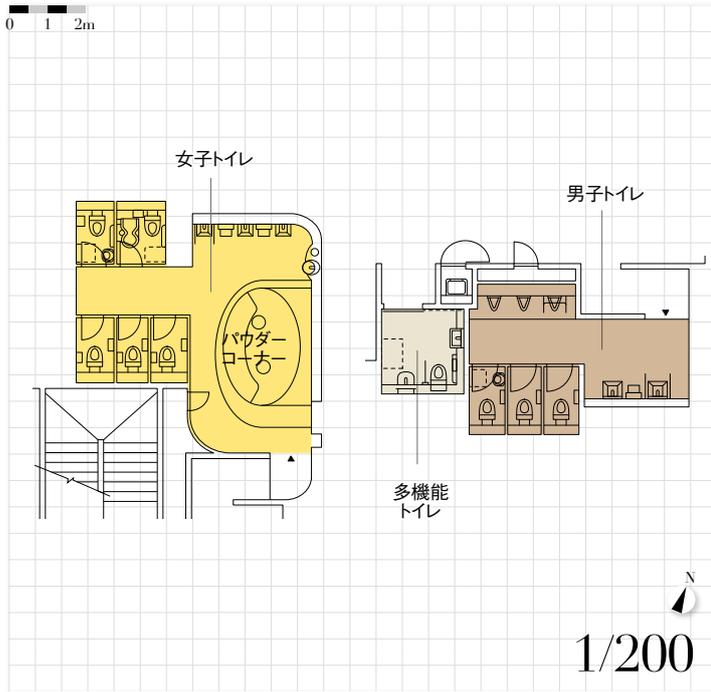
パウダーコーナー



ブース

女子トイレ

写真上／ブースコーナー。左／パウダーコーナーはソファが置かれ、座って化粧直しができる。左にブース、奥に洗面コーナー。



男子トイレ

手前に洗面、奥に小便器・ブースコーナー。便器や洗面器は壁掛式。女子トイレ同様、黒い壁とタイルで統一した。



多機能トイレ

機能性とデザイン性を両立させたトイレパック「RESTROOM ITEM 01」を採用した。ペーパーシートも完備。

イベッドだったとのこと。都会の宙に浮いているような1室の窓ぎわに横たわり、大開口のフレームで切り取られた景色を楽しんでもらおうという趣向だ。こうしたデザインナーからの提案を生かしながら、ホテル設計にあたった日建設計の皿海博章さんはこう語る。

「ここは四方にさほど高層ビルがなく、景色が非常にいいので、開放的な非日常を味わっていただきたいと考えて設計しました」。実際、客室の多くの窓辺にイベッドが配されているという。

今回見学したのは、33階の「ザ・プリンスギャラリースイート」と30階のスパ。スイートは中央に水まわりのコアをまとめ、リビングと寝室をほどよく分けたプラン。どちらの部屋からも都会の風景が存分に眺められる。

水まわりはトイレを独立させ、浴室に広い洗い場を設けた点が特徴的。「洗い場はしっかりとって、シャワーブースも一体にする、それが当初からのイメージでした。外国人にも日本の文化を感じてもらいたい想いがありましたね」と篠塚さん。一方、スパのトリートメントルームも浮揚感満点。窓ぎわのコーナーにはイベッドが置かれ、眼下の景色を堪能しつつ施術後のひとときが過ごせる。さらに、トイレも大開口に面しており、「開放的すぎてみなさんに驚かれます」とは皿海さんの弁。



ブース

女子トイレ

写真上／手前に洗面、奥にブースコーナー。左／パウダーコーナーは、木材や格子装飾を用い、和のイメージ。高さの異なる荷物棚を設けた。

パウダー・洗面コーナー



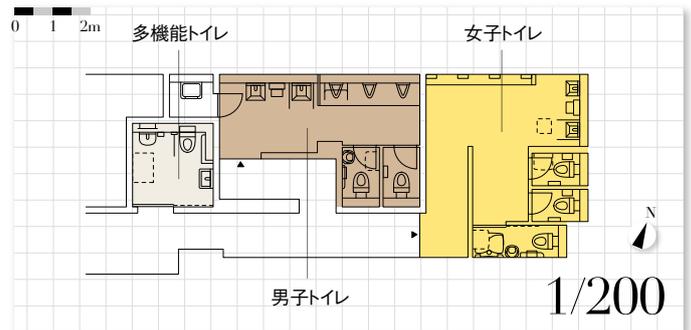
男子トイレ

小便器は壁掛式。壁面の格子装飾の背後には、間接照明を設置。



多機能トイレ

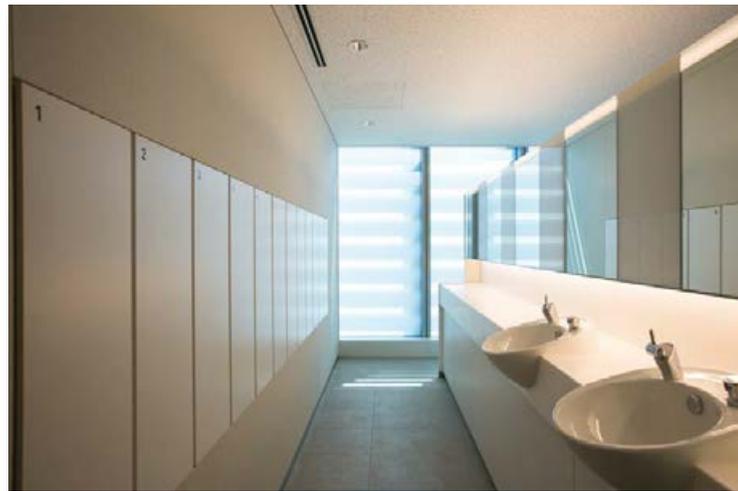
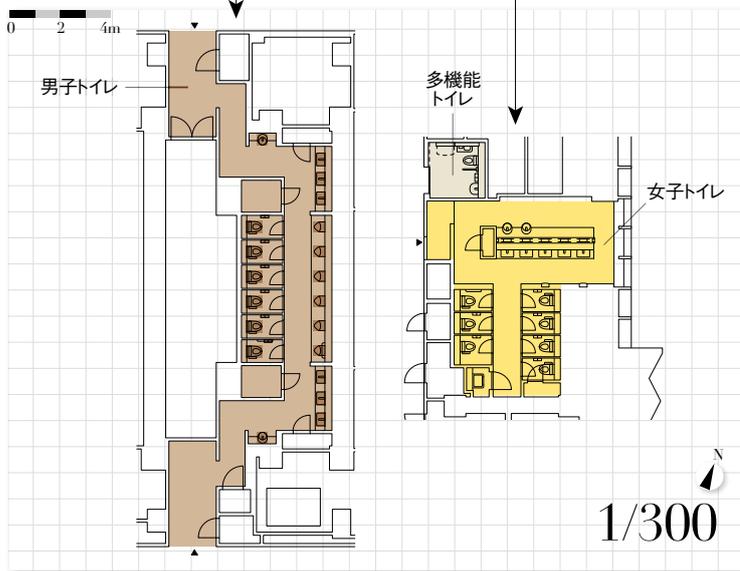
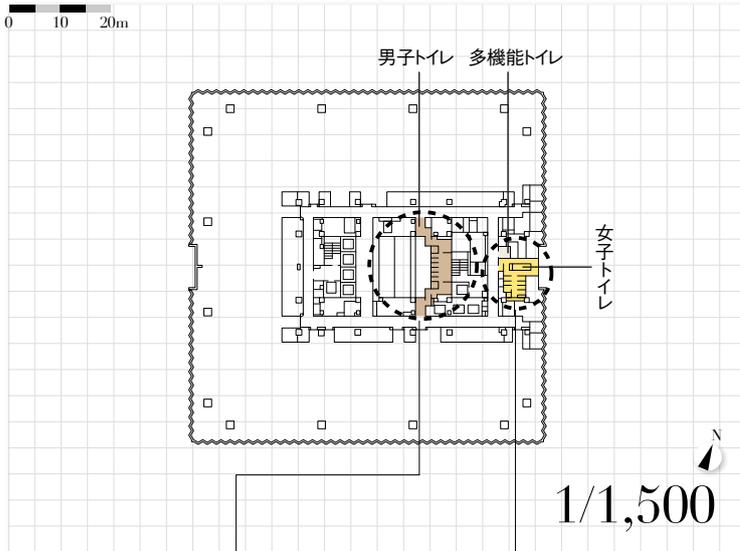
木調デザインは、男女トイレのみならず、多機能にも共通。オストメイトにも対応できる、汚物流しを設置した。



「外の環境と一体化した『道』のような施設をつくり、各フロアでいろいろな景色が楽しめるようにと考えました。トイレについても、各階で用いた素材やデザインの意匠をそのまま引き込んでいます」

1階は赤坂見附側からアクセスする玄関口にあたるため、明るくはなやかなイメージ。一方、3階は上質な飲食店が集うため、落ち着いたダークな色調でまとめている。トイレもそうした雰囲気を感じており、なかでも印象的なのは3階の女子トイレ。なんとトイ

豊かな地形や自然を生かした商業ゾーン



女子トイレ

写真上/パウダーコーナーに、歯みがきボウルを設置。壁面には小物入れが連なる。右下/トイレは壁掛式を採用。左下/洗面コーナーとブースコーナー。



男子トイレ

洗面コーナー、小便器・ブースコーナーを直線上に配置。オフィス両側から、トイレにアクセスすることができる。



多機能トイレ

白で統一した、清潔感のあるデザイン。オフィス階では、各フロア的女子トイレ脇に、多機能トイレが設置されている。

配置計画の見直しで オフィスのトイレにも 明るさを

最後に、オフィスの基準階のトイレを見学した。男女トイレとも白を基調にしたシンプルで清潔感あるインテリアだが、特筆すべきは女子トイレが開口部に面している点。山内さんによれば、当初は男女とも両サイドに抜けられる窓のないトイレを想定していたが、設計途中で女子トイレは外壁に面した配置に見直したという。

実際に見ると、手前の洗面とパウダーコーナーの間仕切り壁を低く抑えることで圧迫感が軽減され、通路を兼ねた奥の窓ぎわの開放感が高まっている。「自然光が入るだけで気持ちがいいし、天井の抜けによって広がりも感じられる。やってよかったなと思います」と山内さん。篠塚さんも「ミラーの機能を損なわない間仕切り壁の高さと天井の抜けによる開放感の両立については、けっこうスタディしました。結果的に、ブースを出した後、手を洗ってパウダーコーナーへ行くという回遊動線もうまく整理できました」と出来ばえに満足そうだ。

東京 ガーデンテラス 紀尾井町

Tokyo
Garden Terrace
Kioicho

建築概要

所在地	東京都千代田区紀尾井町1-2ほか
主要用途	オフィス・ホテル・住宅・店舗ほか
事業主	西武プロパティーズ
設計・監理	日建設計
外装デザイン	Kohn Pedersen Fox Associates P.C.
施工	鹿島・鉄建・熊谷建設共同企業体 西武・大林・前田建設共同企業体
敷地面積	30,400㎡
延床面積	227,200㎡
階数	地下2階／地上36階(紀尾井タワー)
ホテル	30～36階(客室250室)
オフィス	5～28階
商業施設	1～4階
構造	鉄骨造など(制振構造)
竣工	2016年5月

おもなTOTO使用機器

ザ・プリンスギャラリー 東京紀尾井町

- ザ・プリンスギャラリー スイート
ウォシュレット一体型便器ネオレスト CES989R T46
- スイス・パーフェクション スパ キオイ
ネオレストAH1 CES9787PW/
CERA 洗面器 VB616210/
CERA 水栓 HG15070T

オフィス基準階

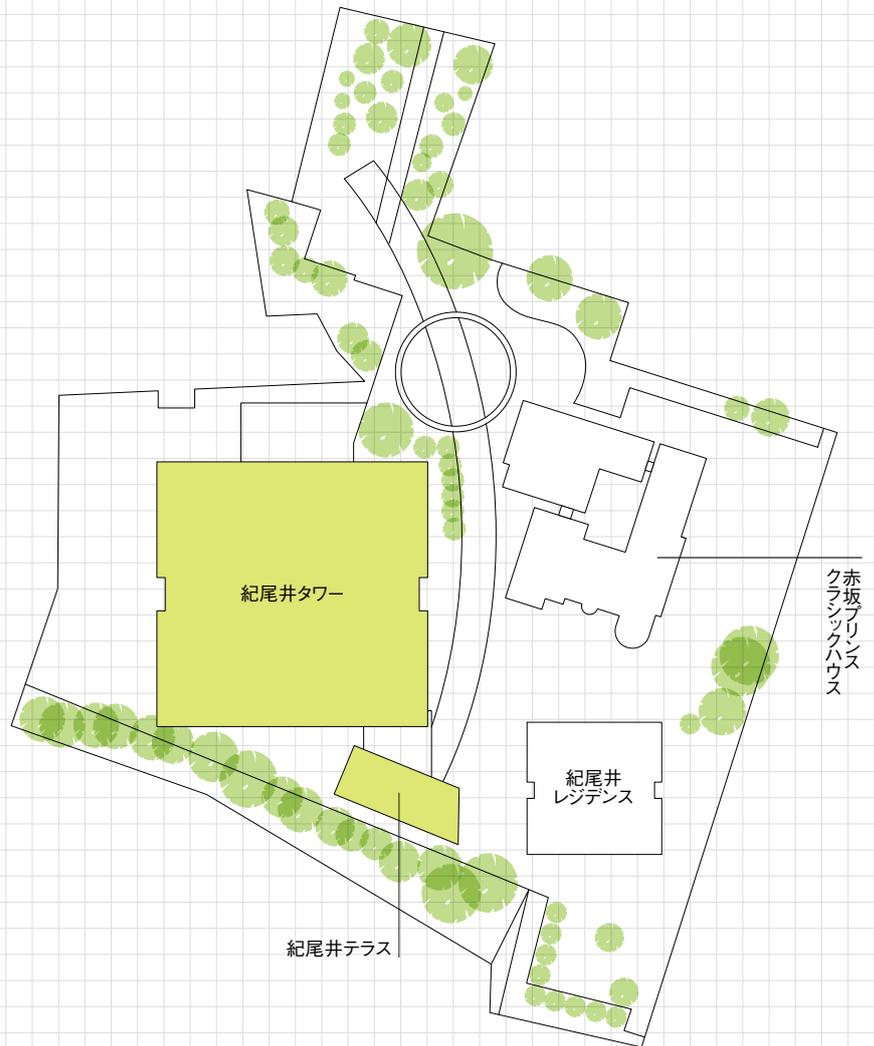
- 男子トイレ
壁掛式大便器 C473P/ウォシュレットP
TCF585V6/低リップ壁掛小便器 UU500/
角形洗面器 L520/歯みがき器 L595
- 女子トイレ
壁掛式大便器 C473P/ウォシュレットP
TCF585V6/角形洗面器 L520/歯みがき器 L595
- 多機能トイレ
多機能トイレバック UTFDB1

紀尾井テラス3階(紀尾井レジデンス側)

- 男子トイレ
壁掛式大便器 UAXC2BP1AN/ウォシュレットP
TCF585V6/低リップUS一体型小便器
UFS900R/壁掛ハイバック洗面器 LSV130DNPL1/
壁掛洗面器セット L710CM+TENA12AH
- 女子トイレ
壁掛式大便器 UAXC2BP1AN/
ウォシュレットP TCF585V6/
壁掛ハイバック洗面器 LSV130DNPL1/
壁掛洗面器セット L710CM+TENA12AH
- 多機能トイレ
フラットカウンター多機能トイレバック
XPDAIRS3111WWW

東京ガーデンテラス紀尾井町 配置図

0 20 40m



1/2,000



丹青社
CS事業部
デザイン統括部
デザイン6部 部長
チーフデザイン
ディレクター

日建設計
設計部門
設計部

日建設計
設計部門
設計部 主管

西武
プロパティーズ
都市開発部
アシスタント
マネジャー

西武
プロパティーズ
都市開発部
マネジャー

川崎喜一郎

山内暢

皿海博章

猪鼻茂樹

篠塚正博

Kawasaki Kiichiro

Yamauchi Toru

Saragai Hiroaki

Inohana Shigeki

Shinozuka Masahiro

今、住宅会社の動きから目が離せない。
活動領域はさまざまだが、それぞれの土地柄、
会社の性格、そして会社をリードする
人物の性格、マーケティング戦略……。
これは、その個性的な活動で
地域に生きる会社のドキュメント。

建て主の「こだわり」にこだわる新しい家づくり

代表取締役

蔵持 圭一

さん

似たような建物が並ぶ住宅街に、1棟だけ、つくり込まれた、独特の存在感を見せる家がある。蔵持ハウジングが今年5月にオープンさせたモデルハウス「THINKHOUSE」。落ち着きのあるたたずまいの邸宅はしかし、中に入ると驚きに満ちている。まず中央の中庭を囲んだ八角形平面。「神事にも使われたといわれますが、八角形はもともと日本人にはなじみ深い形なんです。東京駅も八角形でしょう」と蔵持ハウジング社長・蔵持圭一さんはさらりと言う。しかし、このモデルハウスの見どころは、印象深い平面形だけではない。

一度外に出たことで、地元のよさが見える

ルーツをたどれば、戦後、蔵持さんのおじいさんが建設業を起こしたところに行きつくが、現在の蔵持ハウジングは、2003年、現会長で蔵持さんの父・勇さんが立ち上げた会社。蔵持さん自身は、それまで建築とは無縁のアパレル業界で働いていた。いわば流行の最先端を歩く仕事で、学生時代からかかわ

っていたこともあり、早い段階で責任ある仕事も任せられ、海外に買い付けに出かけたこともあったという。ただ、早くから責任を負った分だけ業界の裏側や「流行のつくり方」をのぞき見る機会も多かったのだろう。仕事を辞めて父の立ち上げた会社を手伝うようになったのは、蔵持さん25歳のときだった。蔵持ハウジングのホームページのなかに「茨城の暮らしをもっと豊かに愉しもう」というフレーズがあるのだが、これは都市部で暮らし、また世界を見てきた蔵持さんだからこそ見える茨城の豊かさをアピールしたものだといえる。ずっと地元においては気づかない、ほかの街とは違うよさ、豊かさを第三者的な目で見ているのだ。そんな客観性が、蔵持ハウジングの家づくりにも生かされようとしている。

「数寄」を引き出す 独自路線

蔵持ハウジングでは、勇さんが大工出身ということもあり、「新数寄屋建築の大工集団」を標榜してきた。厳選した国産無垢材と確かな技術。施工実績を

見ても、和風の住宅が多い。だが蔵持さんは「数寄はスタイルではなく精神」だと言う。それをさらに加速させるためにつけたのが「THINKHOUSE」。

「本来『数寄』は『好き』から来ている言葉で、言い換えれば各自のこだわりです。家を建てるにあたって、自分のこだわりは何か、少し大きさにいえば自分の人生を考え直してもらいたいと思っています」

八角形平面だと、中庭を中心に8つ、合計16のスペースが生まれる。各スペースは、必要な機能を納めつつ、そのあり方や存在自体を考えさせる。

たとえば、ドレスルームは必要か、クロゼットの衣類の収納の仕方はこれがベストか、パウダールームとトイレが一緒にあるのも悪くないかもしれない、などなど。つまり「こんな家をつくりたい」を示すモデルハウスではなく、「どんなことでもできます。一緒に考えます」を示すためのモデルハウスなのである。典型的なのが、自動車のシートに使われていたレザーを張った階段まわり。決してそれが

いいといっているわけではなく、「こんなのもアリだと思いませんか」という挑戦的とも思える提案になっている。

「いろいろな家づくりがあるとしますが、つくり手側のロジックではなく、本当にこだわりのある人に向けて、自分たちはもつと何かできるのではないかなと思う」

建て主のこだわりを徹底的に付き合っていれば時間がかかる。当然、経営的にはきびしい、と思いがちだが、「そんなに大変なことではない」と、ここでも蔵持さんはさらり。

「いろいろなシステムをはじめとして、ほかの業界のほうが進んでいることはたくさんあります。そういうものをうまく建築業界でも生かしていけばいい」

蔵持ハウジングの活動を、蔵持さんは「住宅業界のベンチャー」だと言う。数は多くなくとも、確実に潜在するこだわりの強い建て主との家づくり。建て主だけでなく、業界の固定観念もさらりとかわして、独自の路線を歩みつづける。

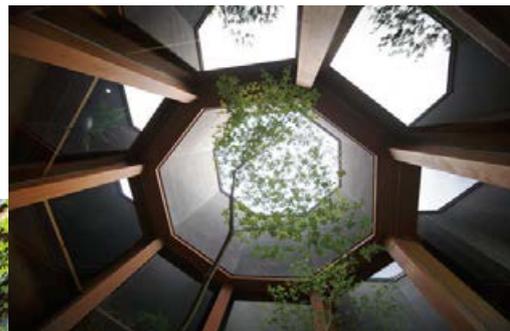


KURAMOCHI Housing

Data

(株)蔵持ハウジング

- 本社所在地
茨城県牛久市中央 5-13-15
- 電話
029-878-3966
- 代表取締役
蔵持圭一
- 会社設立
2003年
- 従業員数
30人
- 事業内容
土木建築工事の
設計・施工および管理
土木資材の販売
宅地建物取引業
損害保険代理業
前各号に付帯する一切の業務
- 売上高
20億円(2015年9月期)
- URL
www.kuramochi-housing.co.jp
- TOTO使用機器
- ・キッチン
水栓金具(CERA)
- ・浴室
ハンドシャワーヘッド(CERA)
- ・洗面所
洗面器、水栓金具(CERA)
- ・トイレ
便器 ネオレストAH2W
手洗器、水栓金具(CERA)



写真上／八角形の建物中央に、3坪ほどの中庭。ガラス屋根と吹抜けで、採光性・通気性もよい。左／書斎と中庭をつなぐ戸口にて、社長の蔵持さん。

Kuramochi Keiichi

くらもち・けいいち／1979年茨城県生まれ。25歳でアパレル業界から転身。父・蔵持勇氏が創業した蔵持ハウジングに入社。2008年より代表取締役。アパレル業界で鍛えたセンスと、祖父以来の伝統的な家づくりで学んだ知識で、新しいこだわりの住宅を提案する。



写真右／ダイニング、奥にはキッチン。中庭側に開口が連なる。左／右の写真より1階トイレ、2階トイレ、1階浴室。



インサイド・アウト

TORAFU ARCHITECTS – Inside Out

「都市>建築>インテリア>家具>モノ」といった既存の枠組みを
超えて広がる、トラフ建築設計事務所の思考と活動を紹介します。

本展では、展示作品がTOTOギャラリー・間(TOTO乃木坂ビル3-4F)の空間を飛び出して、
Bookshop TOTO(同2F)、セラトレーディング・ショールーム(同B1-1F)など、ビル全体で展開されます。
TOTOギャラリー・間オリジナル・デザインの「空気の器」も登場、ご期待ください。



Big T (2016年) 協同設計／寶神尚史



©阿野太一

ギャラリートーク

「アウトサイド・イン」

クリエイティブな各界の第一線で活躍する方々をゲストに迎え、トラフとのコラボレーションから生まれたもの、そして、これからの可能性についてトラフとともに語りあっていただきます。

日時(2016年) ゲスト

10月16日(日) 大内裕史(WOWビジュアルアートディレクター)

10月30日(日) 野老朝雄(アーティスト)

11月13日(日) 芦沢啓治(建築家、石巻工房代表)

11月19日(土) 保坂健二郎(東京国立近代美術館主任研究員)

各回14:00~15:30/参加無料

事前申し込み制/定員50名

会場/TOTOギャラリー・間

詳細はTOTOギャラリー・間

ウェブサイトをご覧ください。

インサイド・アウト

文／鈴野浩一、禿真哉

ホテルの小さな客室の内装を手がけたことからトラフの活動が始まりました。このインテリアデザインのプロジェクトを最初に手がけたことで、小さなモノから発想して空間をつくることの可能性に気づき、その後の取り組みの大きなきっかけとなりました。私たちの仕事は、指輪などの小さなプロダクトからインテリア、舞台美術、建築まで幅広い範囲におよんでいます。どんなことであれ、目の前にあることに興味をもって積極的に取り組むことで、さまざまな領域を横断しながら活動してきました。

建築は、敷地とその環境など、与えられた条件を受けて初めて計画することができます。一方で、初めてプロダクトデザインの依頼を受けたとき、どこで誰に使われるのかもわからないため、建築を学んできた私たちには戸惑いがありました。そういう背景から、たとえば小さなプロダクトであっても「敷地」を自ら設定することで、その固有の条件を手がかりに進められることに気づきました。そうすることで、建築が周辺環境と密接に関係するように、そのスケールにとどまらない広がりを与えうることもわかってきました。それを実践するひとつの事例として、私たちも参加している石巻工房のプロジェクトがあります。もともと東日本震災後、市民工房として生まれた石巻工房は、地域との小さな接点をつくるような家具のデザインを通じて、地元の雇用を生み、今では石巻における

Next Exhibition
at
TOTO
GALLERY・MA



次回 予告

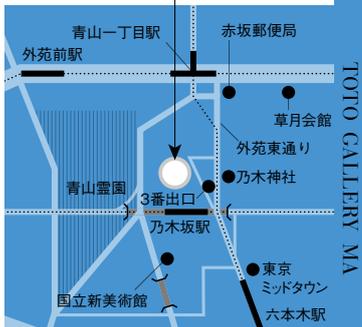
堀部安嗣展 建築の居場所

自然素材をたくみに取り入れつつ、幾何学的な美しさと静謐なたたずまいをもつ空間を数多く生み出してきた建築家・堀部安嗣氏。作品が完成するまでの道のりや、施主や施工者などそこに携わる人々の姿を、映像を中心に紹介。その裏に隠された、堀部氏の建築に対する想いを浮き彫りにします。

会期
2017年1月20日(金)～3月19日(日)
講演会
2017年1月27日(金)／イノホール
*事前申し込み制
詳細は、TOTOギャラリー・間
ウェブサイトをご覧ください。

TOTO ギャラリー・間

所在地
東京都港区南青山1-24-3
TOTO乃木坂ビル3F
電話／03(3402)1010
ファクス／03(3423)4085
開館時間／11:00～18:00
休館日／月曜日・祝日、
ただし11月3日(木・祝)は開館
入場料／無料
アクセス
●東京メトロ千代田線
「乃木坂」駅下車3番出口徒歩1分
●都営地下鉄大江戸線
「六本木」駅下車7番出口徒歩6分
●東京メトロ日比谷線
「六本木」駅下車4a出口徒歩7分
●東京メトロ銀座線・
半蔵門線、都営地下鉄大江戸線
「青山一丁目」駅下車
4番出口徒歩7分

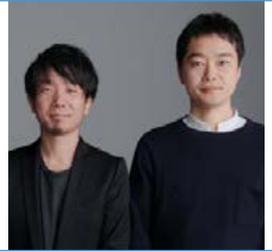


www.toto.co.jp/gallerma/
61

会期／2016年10月15日(土)～12月11日(日)

トラフ建築設計事務所／鈴木浩一と亮 真哉により2004年に設立。建築の設計をはじめ、インテリア、展示会の会場構成、プロダクト、空間インスタレーションなど多岐にわたり、建築的な思考をベースに取り組んでいる。おもな作品に「テンプレート イン クラスカ」(04年)、「港北の住宅」(07年)、「空気の器」(09年)、「ガリバーテーブル」(11年)、「Big T」(16年)など。11年「光の織機 (Canon Milano Salone)」で、エリートデザインアワード最優秀賞受賞。15年「空気の器」が、モントリオール美術館の永久コレクション認定。

TORAFU ARCHITECTS



©筒井義昭



DŌZO BENCH(2016年)

©小川真輝



空気の器(TOTOギャラリー・間オリジナル・デザイン、2016年)

©巽 陽介(ヘルシー)

トラフ講演会

「インサイド・アウト」



東京と金沢で開催いたします。
詳細はTOTOギャラリー・間ウェブサイトをご覧ください。

産業として定着しつつあります。この試みを、家具から都市へと広がる提案のひとつの実践の場ととらえ、継続して取り組んでいます。「インサイド・アウト (Inside Out 裏返し)」というタイトルは、本展でトラフの頭のなかをさらけ出すこと、そして、トラフがこれまで「都市V建築VインテリアV家具Vモノ」といったヒエラルキーにとらわれないアプローチをしてきたことを表象するものです。会場では、これまで手がけてきた作品から、現在進行中のプロジェクトまで、その過程で生み出された100の思考の断片をフラットに並べて、風景のようなものをつくり出しています。一見、関連性のなさそうなその断片のあいだに相互作用を見出せるかもしれない、そういった期待感をもって、実践的に取り組んできた活動を、展示会の場でも実践したいと思いました。これまでのことや、今手がけていることを紹介しながらも、もうひとつ別の視点、別のレイヤーをかぶせることで、さらにその先の発展的な可能性を見出す、実験的な場といえるかもしれません。一方的に鑑賞するだけではなく、私たちもリアルタイムで思考しつづけている、トラフのクリエイションの現場に入り込んだかのようなライブ感を体験してもらえればと願っています。

TOTOの最新情報

TOTO News 3

社会的責任投資指数「FTSE4Good Index Series」の構成銘柄に選定されました

TOTOは、社会的責任投資(SRI※1)の世界的指数である「FTSE4Good Index Series」の構成銘柄に初めて選定されました。FTSE Russell(※2)が作成するこの指数は、ESG(環境・社会・ガバナンス)に関する評価基準を満たした企業への投資を促すよう構成された株式指数(※3)シリーズです。この選定は、TOTOグループの環境・社会・ガバナンスに配慮した経営、情報開示が評価されたものです。TOTOのESG情報は「TOTOコーポレートレポート2016」にて、ご確認いただけます。

※1:投資をする際に、従来の財務分析による投資基準に加え、環境・社会・コーポレートガバナンスといった企業の社会的責任も重視して投資をする方法のこと。※2:株式や債券などのインデックスの開発と管理をはじめとする、投資判断ツールを世界規模で展開しているインデックス会社。※3:指数は「インデックス」とも呼ばれ、市場の動向を示す指標。

www.toto.co.jp/company/profile/library/index.htm 本誌に同封の「TOTO通信2016年秋号アンケート用紙」から冊子をお申し込みいただけます。



TOTO News 4

2016年度「建築設備技術遺産」に「初代ユニットバスルーム」が認定されました

TOTOミュージアム所蔵の「初代ユニットバスルーム」が、一



般社団法人建築設備技術者協会より、2016年度「建築設備技術遺産」に認定されました。「初代ユニットバスルーム」は、1964年の東京オリンピック開催に合わせ、異例のスピードで建設されたホテルニューオータニへ、短時間で大量の浴室を納入するために、日本初(※1)のユニットバスルーム工法として開発されました。今回の認定は、浴室の工期短縮や性能向上に貢献したユニットバスルームの原点としての価値が認められたことによるものです。

※1:JIS規格に適合したユニットバスルームとして。

TOTO News 1

TDY高松コラボレーションショールームが7月30日にオープンしました

TOTO、DAIKEN、YKK APの3社(以下TDY)は、7月30日に「TDY高松コラボレーションショールーム」を高松市林町にオープンしました。TOTO、DAIKENの2社による「TD高松コラボレーションショールーム」で多数のお客さまにご好評いただいておりますが、このたび同じ高松市内に移転し、新たに

YKK APショールームが加わりました。3社一体となることで、お客さまにワンストップでTDY商品をご覧いただける、共同のショールームです。水まわり、床、壁、天井、窓、エクステリアなど、各社最新の商品を実際のリフォーム空間として体感していただけます。



TOTO News 2

世界各地域で展開している「節水トイレ」と「自動水栓(発電タイプ)」で「GREEN GOOD DESIGN AWARDS 2016」を受賞

・水栓(写真上)「オールインワンタイプ」 ・トイレ(写真下)「Neorest LE(中国・ASEAN地域)」

TOTOが世界各地域で展開している「節水トイレ」と「自動水栓(発電タイプ)」が、環境配慮にすぐれたデザインに与えられる世界的な賞である、「GREEN GOOD DESIGN AWARDS 2016」(※1)をGreen Product・Green Corporate部門で受賞しました。2015年に続き2回目の受賞です。環境性能の高い商品(節水・クリーン技術)を世界的に普及させることで地球規模の環境負荷低減に取り組んでいる姿が高く評価されました。

※1:1950年に創設された「GOOD DESIGN AWARDS」を母体とし、持続可能なデザインの発展に寄与するために2009年より始まった、環境配慮にすぐれたデザインを表彰する世界的な賞。



自動水栓
(自己発電技術)
2L・3L・4L/分

全シリーズで受賞。発電タイプ(機能部カウンター下・スバウト内部搭載)。さらに節水化が進んでいる1.5L/分(海外のみ、AC・DCタイプ)も受賞しました。

節水大便器
フチなし・セフィオンテクト・トルネード洗浄
洗浄水量4.8L/回以下



全シリーズで受賞。節水効率(ウォーターテクトロジーによる節水性能・クリーン性能)が評価されました。

TOTOからのお知らせページです。
イベント、新商品、最新情報など知っておいていただくと
お役に立つ情報を心がけています。
合わせてご注目ください。

www.toto.co.jp/publishing

TOTO出版のお知らせ

Book 2

『日本建築の形 I』

日本の風土・歴史・文化が育んだ伝統建築の粋を集大成。仏教伝来以前から明治まで各時代最高峰の建築を収録した2巻シリーズの1巻目。本書では伊勢神宮から東大寺までを紹介。1000年の豊かな建築文化を、貴重な写真と著者独自の視点や高度な専門知識により、日本建築の新たな価値と見方を提示。それぞれの建物の時代背景や特徴、見どころについてのわかりやすいテキストも充実した決定版。



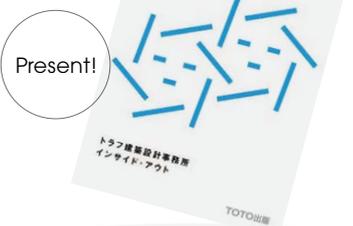
- 著者／齋藤 裕
- 定価／18,000円+税
- 体裁／B4判変型、ハードカバー、
- 400ページ、和英併記
- 発行日／2016年9月21日

Book 1

『トラフ建築設計事務所 インサイド・アウト』

今や、雑誌やウェブサイトなどでその活躍が多く取り上げられているトラフ建築設計事務所。事務所の立ち上げから現在に至るまでの幅広い活動を、彼らがものづくりで大切にしている8つの視点から再編集した作品集。都市、建築、インテリア、家具、モノを等価にとらえ、独特な着眼点によるちょっとしたアイデアから、これまでになかった新しい価値観を生み出す彼らの頭のなかをのぞき込むような1冊。

同封の「TOTO通信アンケート」にお答えいただいた方の中から、抽選で10名の方にプレゼントいたします。



Present!

- 著者／トラフ建築設計事務所
- 定価／2,200円+税
- 体裁／120×173mm、ソフトカバー、
- 416ページ、和英併記
- 発行日／2016年10月14日

セラのお知らせ

洗面器「VERO」専用のキャビネットを発売しました

セラレーディングでは、美しい長方形で仕上げられた「VERO」シリーズの洗面器に、新たに専用のキャビネットを品揃えいたしました。床に接地しないフロートタイプは、圧迫感が少なく、空間をすっきりと見せることができます。スムーズな開閉ができる引き出しは、タオルやボトル類などがしっかり収まる大容量収納。使い勝手とデザイン性を兼ね備えたキャビネットです。



VERO キャビネットセット
DV611401-22ほか
希望小売価格 399,300円(税別)

当商品を掲載した「CERA総合カタログ2016」は、セラレーディングホームページ、またはファクスにてご請求ください。
www.cera.co.jp FAX:03-3402-7185

Information



『TOTO通信』定期購読をご希望の建築家をご紹介ください。

お申し込みはTOTO通信データ管理室まで

Tel / 093 (513) 6234

e-mail / toto_tsushin@jlink-net.com

*法人あての送付となります。

Bookshop TOTO

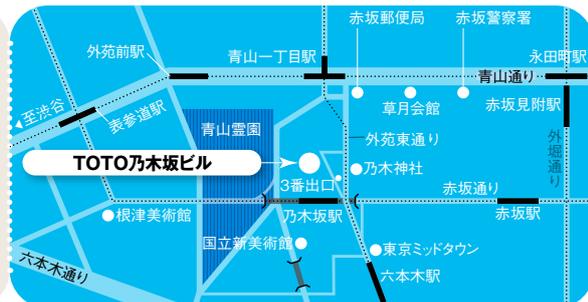
- 所在地／東京都港区南青山1-24-3
TOTO乃木坂ビル2階
- 電話／03(3402)1525
- 定休日／日曜日・月曜日・祝日・「TOTOギャラリー・間」休館中の土曜日・夏期休暇・年末年始

TOTO出版

- 所在地／東京都港区南青山1-24-3
TOTO乃木坂ビル2階
- 電話／03(3402)7138
- ファクス／03(3402)7187
- 全国の書店でお求めください。直営店Bookshop TOTOでもお求めになれます。書店遠隔の方はお問い合わせください。

セラレーディング

- 所在地／東京都港区南青山1-24-3
TOTO乃木坂ビル1階・地下1階
- 電話／03(3402)7134
- ファクス／03(3796)6155
- 営業時間／10:00～17:00
- 定休日／月曜日・祝日・夏期休暇・年末年始



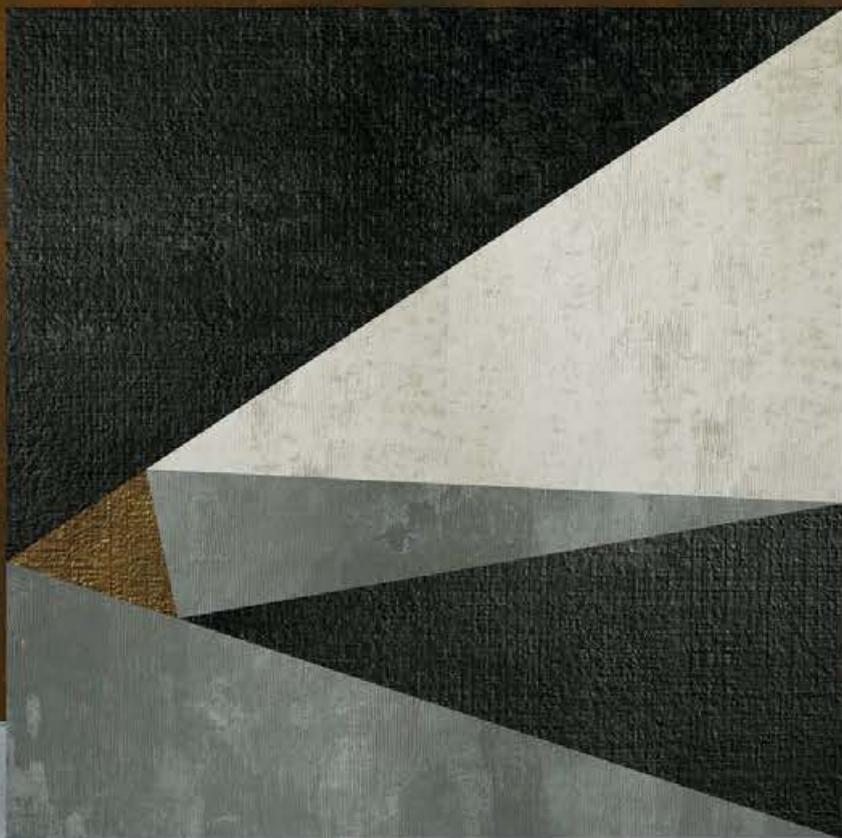
アクセス／●東京メトロ千代田線「乃木坂」駅下車3番出口徒歩1分 ●都営地下鉄大江戸線「六本木」駅下車徒歩6分 ●東京メトロ日比谷線「六本木」駅下車徒歩7分 ●東京メトロ銀座線・半蔵門線、都営地下鉄大江戸線「青山一丁目」駅下車徒歩7分

次号『TOTO通信』は2017年1月上旬発行の予定です。

TOTO

TOTO通信
2016年 秋号

TOTO通信 2016年 秋号 第60巻・第4号 通巻512号
発行日:2016年10月1日 発行所:TOTO株式会社・メディア推進部
〒105-8305 東京都港区海岸1-2-20 汐留ビルディング24F TEL.03(6836)2172



HYDROSOLID

HYDROSOLID [ハイドロソリッド] に関するお問い合わせは
TOTO技術相談室:ナビダイヤル 0570-01-1010 (有料) / FAX:0570-01-2111
受付時間:平日9:00~18:00/土曜日9:00~17:00 (日・祝日・夏期休暇・年末年始を除く)

※ 画像はイメージです。



この情報誌には植林木・森林認証材などを原材料とする環境に配慮した用紙をらびに印刷インク工業連合会認定の植物油インクを主に使用しています。



HYDROTECT

『TOTO通信』のお届け先などの変更はお客様No.(封筒の宛て名ラベル右上に記載)も併せて下記までご連絡ください。
TOTOカタログセンター内 TOTO通信データ管理室 TEL.093(513)6234 FAX.093(571)0999
*当社ならびに当社グループ会社は、個人情報の保護を社会的責務と考えます。お客様からお預かりした個人情報は、
関連法令および社内諸規定に基づき慎重かつ適切に取り扱います。詳細はTOTOウェブサイト(www.toto.co.jp/)をご覧ください。